

日本武道学会剣道専門分科会報

ESPRIT

2020

剣道専門分科会 会長挨拶

長尾 進 (明治大学 教授)

日本武道学会会長退任のご挨拶と剣道専門分科会に期待すること

百鬼 史訓 (東京農工大学 名誉教授)

令和元年度 日本武道学会第52回大会 剣道専門分科会 企画講演
人口減少時代におけるスポーツ

和久 貴洋 (独立行政法人日本スポーツ振興センター 情報・国際部部長)

令和2年度 日本武道学会第53回大会 剣道専門分科会 企画講演
剣道と新型コロナウイルス感染症とをどのように共存させていくのか?

宮坂 信之 (東京医科歯科大学 名誉教授)

特別企画 最新若手研究者の動向

下川 美佳 (鹿屋体育大学体育学部 講師)

特別企画 剣道の海外事情最前線

阿部 哲史 (国際武道大学体育学部 特任准教授)

事業報告
会計報告
事務局便り

Division of KENDO, Japanese Academy of BUDO
日本武道学会剣道専門分科会

目次

挨拶

剣道専門分科会 会長

長尾 進（明治大学 教授）

・・・1

日本武道学会会長退任のご挨拶と剣道専門分科会に期待すること

日本武道学会 前会長・顧問 剣道専門分科会 顧問

百鬼 史訓（東京農工大学 名誉教授）

・・・3

令和元年度 日本武道学会第 52 回大会 剣道専門分科会 企画講演

人口減少時代におけるスポーツ

和久 貴洋（独立行政法人日本スポーツ振興センター 情報・国際部部長）

・・・5

令和 2 年度 日本武道学会第 53 回大会 剣道専門分科会 企画講演

剣道と新型コロナウイルス感染症とをどのように共存させていくのか？

宮坂 信之（東京医科歯科大学 名誉教授）

・・・17

特別企画 2020 最新若手研究の動向

下川 美佳（鹿屋体育大学体育学部 講師）

・・・34

特別企画 2020 剣道の海外事情最前線

阿部 哲史（国際武道大学体育学部 特任准教授）

・・・41

令和元年度 剣道専門分科会 事業報告

令和元年度 剣道専門分科会 一般会計決算書

・・・53

令和 2 年度 剣道専門分科会 事業計画

令和 2 年度 剣道専門分科会 一般会計予算書

令和元・2 年度 剣道専門分科会 特別会計決算・予算書

・・・55

事務局便り

・・・58



挨拶

剣道専門分科会 会長

長尾 進 (明治大学 教授)

このたびの剣道専門分科会総会（令和2年9月7～13日）におきまして、会長への就任をご承認いただきました長尾でございます。佐藤成明先生、杉江正敏先生、巽申直先生、大保木輝雄先生、湯浅晃先生という学識豊かな錚々たる先生方のあとを拝命しましたことに、身の引き締まる思いです。浅学ではありますが、任期の間精一杯務める所存です。何卒宜しくお願いいたします。

21世紀を間近にしたころ剣道人口の減少がみられはじめたなかで、「日本の伝統文化に基づく剣道の人文社会科学研究、スポーツ医・科学に基づく自然科学的研究、競技力向上のための実践的研究、教育現場における指導法の研究、生涯武道としての剣道の研究、国際化への対応」などの諸課題について、より学際的な立場から剣道の未来を考えていこうという趣旨で、百鬼史訓先生を発起人代表、横山直也先生を事務局長として剣道専門分科会の設立が企図され、平成9（1997）年の日本武道学会総会で承認ののち、平成

11（1999）年度より活動を開始して、20年を超える歩みをのこしてきました。

その間おもに、必修化をめぐる課題や指導法の研究、国際剣道連盟加盟国が50か国・地域を超えるほど海外普及が進んだなかでの国際的課題の研究など、その時々々のトピックに対して深くかつ幅広い知見をお持ちの講師やパネリストをお招きして、大会時の企画や年度末の研究会を催してきました。その成果は機関誌『ESPRIT』（年1回発行）に反映され、これもすでに16号を数えております。最近では、中堅・若手の先生方の優れた研究紹介をはじめラインナップ・内容もさらに充実し、バックナンバーを読まれた会員以外の方からも好評を得ております。

こうした会の充実の反面、剣道研究をめぐる状況は大変厳しいものがあります。全国の大学における剣道の授業や研究者・研究拠点が（剣道だけでなく体育・武道全般に言えることかもしれませんが）、ここ30年来の大綱化や法人化の流れもあつ

て、なかなか思うように確保できない現状があります。これは、剣道がオリンピック種目ではないという不利さも一面であるかもしれませんが、何とかしなければならない課題ととらえております。世代や国境を超えて生涯にわたって親しむことのできる身体運動文化としての良い面をアピールしながら、単に体育・武道の一領域としてだけではなく多様な領域のなかで剣道の授業や研究者・研究拠点を確保していく努力が必要と考えます。このことは、この会の設立当時の課題である若手研究者の育成にも直接に関係することでもあり、皆さんとともにより良い方向性を見出していきたいと考えております。

また剣道に関する研究は、すでに人文・社会・自然科学等の各方面から多くの研究がなされ蓄積されていますが、この分科会が当初から課題としていた

「より学際的な立場から剣道の未来を考える」については、道半ばかと思えます。これは武道全般についてもいえることであり、たとえば前会長・湯浅晃先

生が月刊『武道』の連載で他の格闘技・スポーツ・遊戯・身体文化などとの比較のうえで日本武道の本質や固有性、普遍性を考究されたように、剣道研究においても他領域からの視点をより取り入れていく必要があると考えています。

人文系の研究でいえば、たとえば剣道具に関する研究は民俗学や博物館学の分野に大いに見るべきものがあります。そこでの考察は、運動用具史的視点だけではなく、産業史・工業史的観点からの綿密・詳細なものがあり、大変参考になります。また剣道の技術・道具が、槍術との相互補完的關係において発展してきたことはこれまでも指摘されていますが、日本剣道形で用いられる用語（たとえば、「入身になろうとする」など）の意味は、槍術の「入身稽古」を知ることによって理解が深まります。これらは一例にすぎませんが、今後は他学会や他領域

との交流も積極的にはかりながら、剣道研究の厚みを増していく努力が求められると思います。

また、剣道の国際展開との関係でいえば、日本には剣道発祥国として剣道に関する諸々の事項について発信・回答していく姿勢がさらに求められるでしょう。国際剣道界において日本がリスペクトされる存在であり続けるためには、エビデンスに基づく責任ある発信・回答をすることが大事であり、剣道専門分科会に所属する先生方の研究や発信が、その期待に応じていくベースとなるでしょう。

さらには、現今の新型コロナウイルス感染症拡大状況のなか、剣道についてもマスクやシールド等の着用など「新たな様式」が定着しつつあります。本年度の日本武道学会剣道専門分科会企画においては、東京医科歯科大学名誉教授の宮坂信之先生を講師としてお招きし、剣道

が新型コロナウイルスとどう向き合っていくかについて、大変懇切で示唆に富むご講演をいただき、質疑も活発に行われました。その質疑のなかで先生も触れておられますが、今のような状況であるからこそ、たとえば「形」について見直すなど、新たな向き合い方があるはずだのご提言をいただきました。飛沫を多く発生させる掛け声や発声も剣道を構成する重要な一部ですが、たとえば発声と同時の打突が剣道で一般的となったのは、この130～140年ほどではないでしょうか。剣道の悠久の歴史からみれば、比較的新しい事ですし、古流のなかには無声で行われる形も多くあります。こうしたことも含め、今は剣道という身体運動文化のもつ豊かさや多様性を見直す好機であろうと思います。皆さんと一緒に、考えていきたいと思っています。



日本武道学会会長退任のご挨拶と 剣道専門分科会に期待すること

日本武道学会 前会長・顧問
剣道専門分科会 顧問

百鬼 史訓 (東京農工大学 名誉教授)

この度、4期12年間(2008～2020)に亘り日本武道学会会長として長きに亘り就任して参りましたが、令和2年3月31日付けをもちまして退任いたしました。就任中は、諸先生・諸先輩・同僚・後輩のみならず多くの会員の皆様方のご指導とご協力により大役を務めることができました。心より厚く御礼を申し上げます。この間、学術活動の活性化や学会会員の大学におけるステータス向上のための啓発、武道の本質にかかわる議論や国際的学術活動の発信・拡大等を行って参りました。特に2018年には学会創立50周年記念事業の実施に関われましたことは、大変意義深く名誉なことと思っております。学会の発展に、多少なりとも寄与できたのであれば幸いと思っております。そして、新たに剣道専門部会の仲間であり役員であった大保木輝雄新会長そして長尾進新理事長にバトンを渡すことができ、内心安堵していると同時に、両氏は学会の発展に大いに貢献してくれるものと確信している次第です。衷心より日本武

道学会の発展をご祈念申し上げます。

さて、剣道専門分科会の設立当時には、剣道の国際化が進展する一方、国内では剣道人口の減少が問題視され、日本の伝統文化としての剣道に関する様々な課題がある中で、様々な角度や学際的な立場で剣道の未来を考え研究していく組織が必要であると考えられるようになっておりました。そうした中、私も発起人代表として剣道専門分科会の設立を学会執行部に働きかけ、平成9年(1997)9月の学会総会には設立準備に入ることが了承され、平成10年(1998)9月の学会大会時に設立発起人会を開催して、9月30日には発起人名簿と設立趣旨を添えて正式に設立申請し、同年の第2回理事会で承認されました。翌平成11年(1999)年9月には、第1回の分科会総会を開いて会則を制定・施行し、平成12年度から学会大会時に剣道専門分科会主催の企画が開催されるようになりました。

佐藤成明初代会長のもとに幹事長として分科会の旗振り役を

務めさせていただきましたが、それ以来21年が経過しようとしております。

現在、剣道専門分科会の活動は、①日本武道学会年次大会時の「分科会企画」における講演・シンポジウム・ワークショップ等の開催、②研究者同士の研鑽や若手研究者の育成を目的とした「研究会」の開催、③それらの活動等を会報「ESPRIT」として年1回継続的に刊行、この他に、学会大会時の「本部企画」において、時々のテーマに即したパネリストや報告者を分科会から推薦しているなど、多岐にわたって積極的に活動していることは大変喜ばしいことと思っております。

今後、剣道専門分科会の益々のご発展と会員の皆様のご活躍を期待いたします。

最後になりますが、先生方の益々のご活躍を期待して、いくつか提言させていただくことをご容赦ください。

1. 武道(剣道)の普及・発展に資するために武道(剣道)に関わる様々な課題に対して、学術的

観点から研究成果を社会に還元して欲しい。

2. 競技化・スポーツ化が進む中で、武道（剣道）としての本質的価値は何かを常に問うて欲しい。

3. 剣道という枠にとらわれなくて、武道全体あるいはもっと広い視点から、剣道をとらえて研究して欲しい。（俯瞰的思考）

4. 先行研究を十分に吟味すること、そして結論を急がないで欲しい。（オリジナリティと客観性）

5. 中学校武道必修化の目標が達成できるよう武道教育の充実や課題解決につながる基礎的研究をして欲しい。

6. 大学教員の皆様においては、大学において他領域の教員と同

等もしくはそれ以上の評価が得られるよう努力して欲しい。（研究業績、科学研究費などの外部資金の獲得、学位（博士号）の取得、国際学会への発表等）

【参考文献】

1. 日本武道学会創立五十周年記念誌（日本武道学会）

人口減少時代におけるスポーツ

講師：和久 貴洋 氏（独立行政法人日本スポーツ振興センター 情報・国際部部長）
司会：小澤 聡 氏（常磐大学 准教授）、齋藤 実 氏（専修大学 教授）

日時：令和元年9月6日（金） 15:00～16:00

場所：國學院大學 横浜たまプラーザキャンパス

1. イントロダクション

【小澤】ただいまから日本武道学会第52回大会剣道専門分科会企画を始めさせていただきます。司会は、専修大学の齋藤と常磐大学の小澤が担当させていただきます。2人ではありますけども、この企画が盛会となりますよう努めさせていただきます。どうぞよろしく願いいたします。まず初めに、剣道専門分科会会長の湯浅先生にご挨拶をいただきます。それでは、湯浅先生よろしく願いします。

【湯浅】これから、和久先生より「人口減少時代におけるスポーツ」というテーマでご講演をいただきます。人口減少、とりわけ剣道界において若年層にどのように剣道を取り組んでいくか、ということが喫緊の課題として私たちは考えています。そういったことも含めまして、今日、和久先生からお話いただくことを参考にしながら、剣道が一層発展していくのかということをおぼせて

いただきたいと思います。

和久先生に先ほどお話を伺ったところ、オリンピック・パラリンピックの誘致が成功し、開催が決まった直後に連絡があったそうですが、最初に思ったことは、「うれしい」というよりも「やばいぞ」というようなことを思われたそうです。それ以降現在に至るまで、オリンピック・パラリンピックの仕事だけではなく、日本のスポーツ振興政策の立案の根幹に携わっておられます。そういったお忙しい中、我々のために時間を割いていただきまして、本当にありがとうございます。本日は、どうぞよろしく願いいたします。

【齋藤】本企画の趣旨について、ご説明をさせていただきます。現在の日本スポーツは、大きな変換の真っ只中にあることは、皆さんも十分に感じておられることと存じます。東京オリンピック・パラリンピックを来年に控えまして、日本や近隣の国においては、オリンピック・パラリンピックのプレ大会が今、行われています。また、数週間後には世界三大スポーツイベントとなっていますラグビーのワールドカップが行われます。また、2021年には関西方面で、世界マスターズゲームスと

いう大きな大会が開催されます。これらのようなスポーツイベントはもちろん、国内のスポーツが盛んに行われている背景には、2000年6月に策定されましたスポーツ振興進行表計画、その後2010年のスポーツ立国戦略、その翌年の2011年には、1961年に制定されたスポーツ振興法から50年ぶりにスポーツ基本法が制定されたことが関連しています。それに伴いまして、様々な法律や施策が打ち出されてきています。そこで本講演では、近年でのスポーツムーブメントの最前線におられまして、政策や施策の立案やその実施に深く関わってこられた、独立行政法人日本スポーツ振興センターの情報・国際部部長の和久先生をお招きいたしました。

和久先生は、定職のほか、国立スポーツ科学センター副センター長、筑波大学客員教授も務めておられます。東京オリンピック・パラリンピックを丁度1年後に迎えるこの時期に、大変なところかと思えますけれども、お越しいただきました。和久先生の略歴につきましては、大会抄録集の8ページに掲載していますので、ご参照いただければと存じます。また略歴に加えて、沢山の関係著書を





掲載させていただきました。

本日、和久先生には、現在、革新的に進められています、日本スポーツ政策のフロントラインについて、政策実行者のお立場で、人口減少時代におけるスポーツをテーマに情報提供をいただきます。皆様におかれましては、ご自身のライフスタイルの視点や剣道実施者の指導的立場、また、武道や剣道に対する政策実行者の立場、それぞれの視点から今回の講演を聴講いただければと存じます。長くなりましたが、和久先生、どうぞよろしく願いいたします。

2. 講演

【和久】 みなさん、こんにちは。大変ご無沙汰しております。古巣に戻ってきた感じで、大変うれしく思っています。この場に立てることを非常に嬉しく思うとともに、企画委員の先生の皆様には貴重な機会を設けていただき、厚く御礼申し上げます。

現在、私は日本スポーツ振興センターの情報・国際部に在籍し、主に諸外国のスポーツ戦略とか、各国の取り組みに関する情報を収集・分析して、国や自治体に返すという仕事をしています。それを通して、国や自治体のスポーツ

政策をより活性化させる仕事をしています。そして今日は、これまでの仕事の中で集めてきた情報をもとに、これからの時代における、スポーツの在り方について考えたいと思います。

今日お話しする内容は、4つのパートに分かれています。1つはこれから起こる日本の社会の変化とそこでのスポーツの位置づけを再考します。2点目には、最近10~20年のスポーツ政策の変遷とそこでのスポーツ政策研究を概観します。3つ目は、こうしたスポーツ政策の動向とそれに関連するスポーツ政策研究の最新動向に着目します。最後に最近の重要な取組事例とトピックを紹介します。これらを通して、2020年以降の人口減少時代のなかでのスポーツについて考えたいと思います。

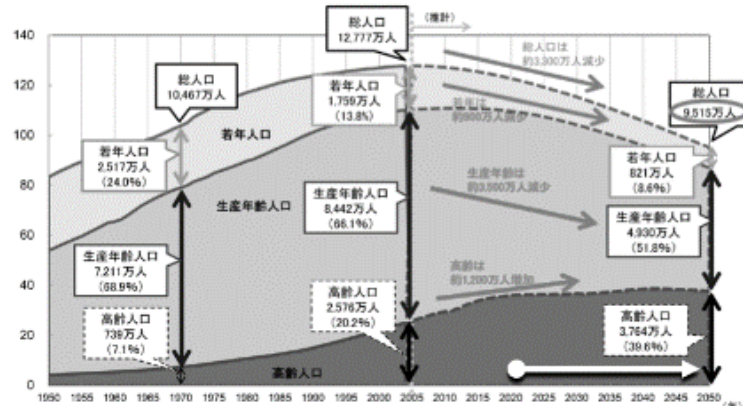
□人口減少時代における日本の社会の変化

これから我々が直面する社会の変化に関して、最も重要なもの

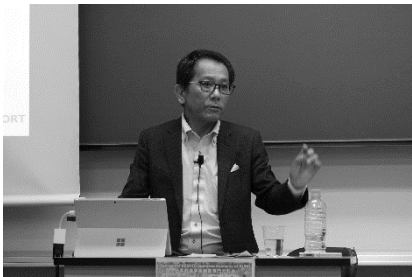
のひとつは人口減少と高齢化です。スライド1にありますように、2020年オリンピック・パラリンピックが開催された後、人口減少が加速することが分かっています。この人口減少時代の中で、人口動態の内訳を見ると、若年層が減り、高齢者層が増加し、その中間にある生産年齢人口が減少します。人口動態は嘘をつかないので、こうした状況が確実に訪れると言って良いでしょう。生産年齢人口の減少は地域の担い手が減ることを意味しているので、日本国内の経済市場は小さくなります。そして、これは結果的に税収の減少を招きます。国の財源も減り、自治体の財源も減ることになります。一方、大都市圏では人口は減らないものの、高齢化が加速します。また、今の日本の社会は、建物や交通インフラをはじめ様々な社会資本が充実した社会です。こうした社会資本は、人口が増える前提で整備されていますが、今後は多くの社会資本が老朽化し、建て替えや修復が必要に

我が国における総人口の推移（年齢3区分別）

- 我が国の総人口は、2050年には9,515万人となり、約3,300万人(約25.5%)減少。
- 高齢人口が約1,200万人増加するのに対し、生産年齢人口は約3,500万人、若年人口は約900万人減少。その結果、高齢化率は約20%から約40%に上昇。



【注1】「生産年齢人口」は15~64歳の者の人口。「高齢人口」は65歳以上の者の人口
 【注2】()内は若年人口、生産年齢人口、高齢人口がそれぞれ総人口のうち占める割合
 【注3】2005年は、年齢別人口の男女差別に按じられて算出している
 【注4】1950~1988、1971年は沖縄を含まない



なります。先ほど申しました税収が減るという状況の中で、保有する社会資本を現在の水準で維持するのは不可能であるとも試算されています。その結果、都市のコンパクト化、すなわち都市が小さくなっていくと考えられています。こうした社会の変化の中で今後どこに投資をすべきかについて京都大学の諸富先生が指摘しています。結論から言うと、これからの都市は人と社会関係資本に投資すべきであると述べています。その理由は、これから、データや知識という無形資産の重要性が高まる時代において、無形資産を作れるのは人間のみであり、人が長く健康である必要があります。しかし、人は1人では社会の中では生きていけず、人と人、あるいは人と地域の絆や信頼関係の中で生きていく存在です。このような人間関係や社会関係は「社会関係資本（ソーシャルキャピタル）」と呼ばれ、そういった社会関係資本の強化に投資をしていく必要がある、と諸富先生は指摘しています。

□社会関係資本とスポーツ

人的資本と社会関係資本が重要視される時代を迎えるにあたって、これらとスポーツはどういう関係があるのでしょうか。人は

長く健康で生きなければなりません。人の健康や体力の維持・向上にスポーツは大きな意義・効果があることは誰もが周知の事実です。スポーツは骨格筋機能及び心血管系機能の維持・向上に効果があり、成人病の予防に有効であることは知られています。WHOの死因上位5つのうち4つは運動不足が関係していることから、運動することは極めて重要です。さらに最近では、読解力や注意力、集中力、認知力、記憶力、自尊心、鬱、といった精神機能や脳機能の改善にも運動やスポーツが効果的であることが分かってきています。認知症の予防に関して、最も研究エビデンスが多いのはスポーツ、運動です。これからの時代、人的資本の投資においてスポーツ・運動は極めて重要な位置づけになっていきます。

一方、社会関係資本については、その醸成・強化が人の健康や地域の経済活動を促進させることが分かっています。スポーツは、地域の中での支え合いや地域の人との関わり、多世代の交流、地域組織活動への参加といった社会

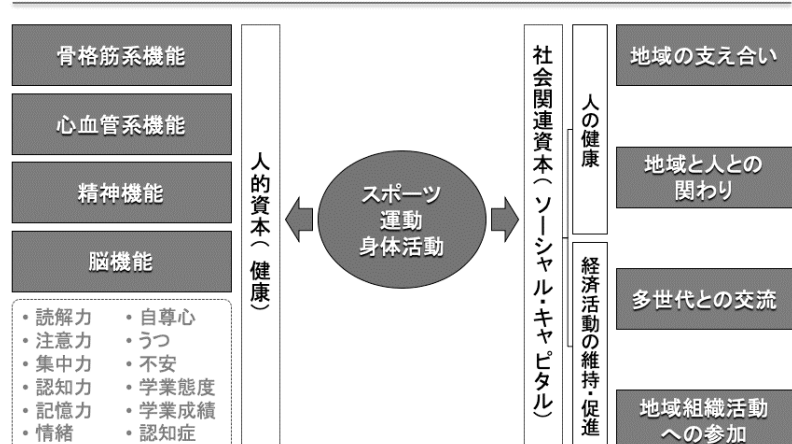
関係資本の醸成・強化に有効であることが明らかにされています。

さて、このようにスポーツの位置付けがこれまで以上に高まる中で、スポーツを取り巻く社会情勢には多様な変化が起こっています。防災・減災への意識の高まり、気象・気候変動、人々の価値観の多様化、女性の活躍促進や障がい者の社会参加などの共生社会の実現、働き方改革、データ産業や知識産業などのビジネスモデルの変化、子供の安全、認知症予防、AI（人工知能）の発達、SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）を使ったコミュニケーションスタイルの変化など、政策・産業・科学技術・自然・人々の価値観や意識など様々な面で変化が起きています。これらの変化は、ピーター・F・ドラッカー（経営学者）が示すイノベーションの7つの機会に該当します。こうした大きな社会変化の中でスポーツの在り方を考える必要があります。

□国内スポーツの現状

社会情勢のみならず、スポーツ

これからの時代におけるスポーツの意義・価値



自体にも変化が起きています。オーガナイズド・スポーツ（組織化されたスポーツ）の人口は、ここ20年間、横ばいもしくは減少しています。それに対し、ウォーキングや筋トレ、ジョギングのような、組織に所属をせず一人のできる「ノンオーガナイズド・スポーツ」への参加者は大きく増えています。ここから我々が認識すべきことは、人々のスポーツへの参加スタイルが変わっているということです。組織化されたスポーツへの参加から個人でのスポーツ活動への参加にシフトしていることを前提に考える必要があります。

次に、来年、東京2020大会があり、2021年には関西ワールドマスターズゲームズ、今年はラグビーワールドカップと大規模な国際スポーツイベントを控えています。多くの人々が、こういった国際スポーツイベントを開催すると、それが刺激になってスポーツに参加する人が増えると考えています。しかし、実は2000年以降、オリンピック開催国でスポーツ参加者やスポーツ参加率が増えた国はひとつもありません。例えば、カナダバンクーバー2010年、スポーツ参加人口は増えていません。また、2012年のロンドンオリンピックでも、オリンピック開催が人々の身体活動を向上させたというエビデンスはありません。他の国々も同様です。オリンピックという大きなスポーツイベントが刺激になって、世の全体でスポーツ参加者が増える

という「トリクルダウン効果（大富豪や富裕層の政策支援を行うことが経済活動を活性化し、結果的に富が低所得者層に向かって徐々に流れ落ち、国民全体の利益となるという意味の経済学用語）」は神話です。したがって、トリクルダウン効果を引き起こすためには、そのために必要な施策や事業をしっかりと実施・展開していく必要があります。オリンピック・パラリンピックの開催自体は、日本やスポーツにとって良いことと考えていますが、それを今後のスポーツ参加促進につなげるためには、そのための政策や取り組みを意図的にしっかりと展開することが重要なのです。また、大規模スポーツイベントをテレビや会場で観戦し、それにインスパイアされてスポーツへの動機付けが高まるという考えもありますが、2017年に札幌で開催された冬季アジア大会時に実施した我々の調査結果では、自宅観戦にせよ会場観戦にせよ、観戦者の多くは運動やスポーツをする習慣がある人でした。スポーツ・運動するという習慣のない人々は、スポーツイベントを観るとは限らないのです。

さらに、次のような研究もあります。スポーツの振興のためにスポーツ普及事業やスポーツ教室などが多く実施されていますが、山形県のある市で行われたウォーキングイベントに参加した200人を対象に、ウォーキングイベント前後で運動をするようになったか行動変容を調査しまし

た。その結果、このウォーキングイベントに参加した8割を超える人はすでに運動をしている人でした。また、ウォーキングイベントに参加したからといってそうした人たちの行動変容は起こらないということも示されました。運動していない人はこうした普及イベントに参加することは少なく、また単発のイベント参加は行動変容への効果も少ないのです。こうしたことは、最近、様々な研究で確認されています。従来、我々が行ってきたスポーツ普及の取り組みは、スポーツへの参加者を増やす意味において、本来の真のターゲットにアプローチできていないこととなります。こうしたスポーツや社会の変化の中で、これからのスポーツをどのように捉え、どのように推進していくかが重要課題なのです。

□国内におけるスポーツ政策

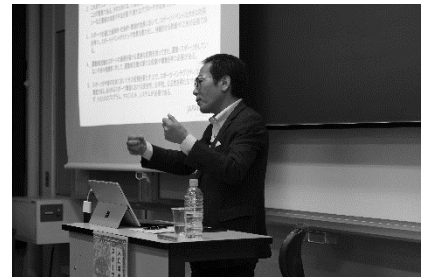
次に、ここ10年ほどのスポーツ政策の動きについて見ていきます。やはりオリンピック・パラリンピックが契機となり、スポーツ政策における様々な革新が起こっています。その中でも最も大きな政策革新の1つは2011年のスポーツ基本法の制定です。スポーツ基本法は実に約50年ぶりに全面改正され、それに基づいてスポーツ基本計画が策定されました。そして2015年にスポーツ庁が創設されました。これは、日本のスポーツ政策やスポーツシステムの大きな革新です。スポーツ庁の創設前後から様々な新規事

業が打ち出されます。2017年頃までは、ハイパフォーマンススポーツ政策領域を中心に、スポーツ・コーチング、女性アスリートの強化支援、トップアスリートの強化研究拠点の在り方、ワールドクラスコーチ育成、デュアルキャリアなどの新規事業が設置され、それらは一定の成果を上げてきました。ナショナルトレーニングセンターも拡充され、いよいよ今月には拡充棟がオープンします。次に、2017年から2019年にかけては、スポーツの参加促進に係る新規の政策・事業が打ち出されています。例えば、大学スポーツの振興のためのUNIVASの創設、障害者スポーツの普及促進、さらには民間ビジネスマンの身体活動量の増加、スポーツエールカンパニー、などの取り組みがあります。これらの他にも、学校運動部活動ガイドラインやスポーツ実施率向上のための行動計画も策定されています。今後の社会の変化を踏まえ、国もスポーツ政策を活性化し、これからの時代にあったスポーツを推進しようとしているのが分かります。このように国のスポーツ政策は活性化していますが、住民のスポーツ参加促進は自治体が担うので、今後は自治体のスポーツ政策の活性化が課題と言えます。

さて、このようにスポーツ政策が活性化する中で、スポーツ政策研究ではどのような研究が行われているか概観します。政策研究は、政策決定プロセスを研究対象とする政策決定研究、政策の実施

過程を対象とする政策実施研究、政策の評価や効果に焦点を当てる政策評価研究、政策を作り出すうえでの様々な課題の分析を行う政策分析研究に体系化されます。こうした観点からスポーツ政策研究を見てみると、スポーツ政策領域では政策実施研究や政策分析研究は比較的多く行われていますが、政策評価研究や政策決定研究は多くはないようです。特に、2010年以降の論文では、国の新しいスポーツ政策に対して、アクターはどう対応するか、課題はどこにあるかといったことに主眼を置く研究が多く見られます。

次に、政策革新研究についてみてみます。「政策革新とは新規と認識される政策」あるいは「中央政府からの自律性又は新規性のある政策が自治体で採用されること、又はその政策自体」と定義されています。政策革新が生じし波及するメカニズムとして、自治体内の内生条件により生じた政策革新が、自治体間の相互参照と国が当該政策を採用によって生じる横並び競争により全国に波及していくという「動的相互依存モデル」を伊藤は提唱しています。中司は、スポーツ政策分野における政策革新について動的相互依存モデルに基づき調査し、スポーツ政策分野では自治体間の相互参照は活発に行われているものの、政策革新が少ないことを報告しています。また、我々の研究においても、2013年以降、スポーツへの社会的・政策的関心が高まっている状況においても、知



識・情報、エビデンスの不足、スポーツ政策革新への意識の低さ、人員・時間・財源の不足などが障壁となり、自治体におけるスポーツ政策革新は少ないという実態を報告しています。

□スポーツ政策における重要課題と最新取組

ここでは、最近のスポーツ政策における重要な課題をいくつか取り上げ、それらに関する最新理論と取組事例を紹介します。まず、スポーツ未実施者の参加促進に関する最新理論・知見としては、行動変容理論、ゲートウェイ、及び居住環境要因が挙げられます。行動変容理論は、人の行動変容を5つのステージ（無関心期、関心期、準備期、行動期、維持期）で捉えるものです。大学生を対象に運動行動の変容ステージに対応した体育授業プログラムを実施することが無関心期や関心期のステージにある学生の運動習慣に一定の効果があつたことが報告されています。ゲートウェイは、ある目的とする行動の獲得又は増強を引き起こす「入り口」となる他の行動のことで、「運動」は喫煙やアルコール摂取の抑制のゲートウェイになることが分かっています。一方、「食事・栄養や食生活に関する健康情報」や

「趣味・余暇活動」は運動のゲートウェイとなりうることが報告されています。スポーツ未実施者の参加促進において、運動以外の要素を組み合わせることはこれまでアプローチしにくかったスポーツ未実施者の集客と行動変容の有効な手段となり得ることが考えられます。しかし、睡眠改善と運動を組み合わせた我々の先行研究の結果では、運動以外の要素の組み合わせのスポーツ未実施者の集客と行動変容に対する効果は限定的であったことも示されています。こうした中、最近、スーパー・商店やバス停・駅へのアクセス、景観の良否、歩道や自転車道の整備状況など生活空間周辺環境要因が人々の身体活動量の影響要因として注目されています。

次に、子供のスポーツ活動に対する保護者の影響、あるいは将来のライフスタイルにおけるスポーツ・運動への関わりの中でその関係性が注目されている「フィジカルリテラシー」を取り上げます。フィジカルリテラシーとは、「身体を動かすことやスポーツ活動に親しみ、継続するために必要となる基本的な知識・スキル、態度、意欲、動機などの素養を習得すること」ということができます。我々が子供を持つ保護者 1000 名を対象に行ったオンライン調査の結果では、多くの保護者はスポーツが体力・健康に有益であることを認識していましたが、スポーツにはそれ以外の子育てで役立つ多様な効果や意義があること

を認識していないことが明らかになりました。また、保護者が子育てについて信頼する情報源は近所や学校など身近な情報源であり、そうした身近な環境にスポーツに関する正しい知識や情報があることが重要であることも分かりました。

続いて、重要なスポーツ政策課題の 1 つであるスポーツを通じた地域活性化について考えます。人口減少時代において地域の活性化は重要課題の 1 つになっています。地域活性化とは、概念的には、地域に個人的・経済的・社会的・環境的に何らかの付加価値がもたらされている状態と定義され、国際スポーツイベントの招致・開催はそのための有効な方策と考えられています。スポーツイベントが開催地域にもたらす効果には経済的効果、社会的効果、及び環境的効果があることがこれまでの先行研究で実証されており、それらのポジティブな効果を生み出していく工夫が必要で

最後に運動部活動について考えます。運動部活動は、教育政策、学校長の期待する教育機会、顧問の教育上の関心、及び生徒や保護者のニーズなど様々なステークホルダーの関心や期待が関係する難しい課題の 1 つです。運動部活動における政策革新は、2018 年に発表された「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」と「外部指導員の制度化」を挙げることができます。これらの政策革新の背景には教員の働

き方改革がありますが、今後の少子化を踏まえるとフィジカルリテラシーの観点からも運動部活動の在り方を検討する必要がありますと考えられます。運動部活動の効果については、これまでも数多くの研究があり、その効果は大きく健康・発達に関する効果、学業等への教育効果、心理社会的発達に関する効果、及びスポーツや運動への態度や参加に関する効果に整理することができます。今後さらなる研究が望まれます。

□スポーツ・インテグリティ

これからの時代は、スポーツや運動を行っていないスポーツ未実施者の参加促進が重要であり、そうした人々へのアプローチが重要であることを述べました。そうした中で、最近、暴力・暴言やハラスメント、公的資金の不正使用などスポーツ団体の不祥事がメディアで取り上げられています。スポーツをしていない人々は、こうした不祥事を目にしてスポーツをしよう、あるいはスポーツは良いものと思うのでしょうか。これからの時代、スポーツ・インテグリティは避けて通ることはできない課題です。最後に、スポーツ・インテグリティについて考えたいと思います。

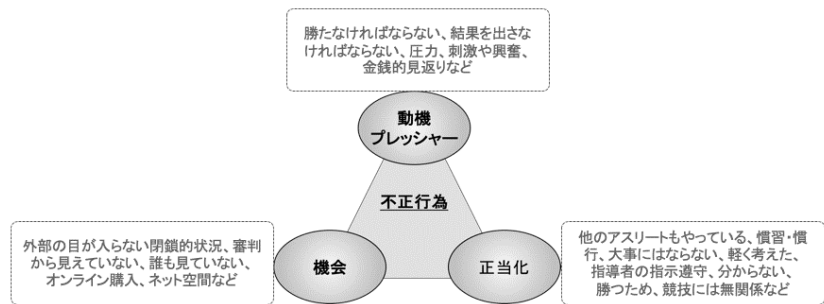
スポーツ・インテグリティは「スポーツが様々な脅威により欠けるところなく、価値ある高潔な状態」と定義されますが、その概念が理解しにくく、スポーツ界・関係者になかなか浸透しないという状況があります。JSC スポ

*Cressey, D.R. (1950). "The criminal violation of financial trust". American Sociological Review. 15(6), pp.738-743

ーツ・インテグリティ・ユニットでは、スポーツ・インテグリティの概念を次のように整理しています。日本は安全で、公平で公正な社会です。その社会の中で行われるスポーツですから、あらゆるスポーツ活動においても、安全性、公平性、及び公正性が保たれなければなりません。具体的には、ゲームや試合の場面、トレーニングや練習の場面、あるいはスポーツ団体の組織運営の場面が挙げられます。こうしたスポーツ場面で安全性、公平性、及び公正性が保たれている状態をスポーツ・インテグリティと言います。ところが、暴力・暴言、ハラスメント、ドーピング、公的な助成金の不正使用、試合結果の操作、指導者資格の不正付与などのように、スポーツ・インテグリティを脅かす様々な要因があります。これらの要因は、スポーツの安全性・公平性・公正性のいずれか、又は複数を損なっています。このように捉えると、スポーツ・インテグリティは理解しやすく、個別の行為や事象の良否に目を向けるのではなく、「安全」「公平」「公正」という原則と照らし合わせる事が大切です。

スポーツ・インテグリティ・ユニットでは、現在、こうした不祥事を未然に防ぐことに取り組んでいます。これまでスポーツ界では、発生した不祥事に対して事後的に対応や対策を講じてきました。しかし、いくら厳しい処分を行ったり、改善策を講じたりしても、事後的な対応だけでは不祥事は根絶しませんでした。この反省

- ・ 米国の犯罪学者D.R.クレッシェーが提唱した、不正行為が起こるメカニズムに関する理論。
- ・ 不正行為は、「動機」「機会」「正当化」の3つの不正リスク(不正リスクの3要素)が全て揃った時に起きる。



から、問題が起こるのを未然に防ぐ、あるいはリスクが顕在化しないようにするという考え方に変わりました。この際に参考にしたのが不正のトライアングル理論です。これは、1950年にアメリカの犯罪学者のクレッシェーが「どのようにして不正行為が起こるのか」というメカニズムを提唱した理論です。不正行為は、「動機」と「機会」と「正当化」の3つの条件が全て揃った時に起こるといえるものです。この理論に基づき、スポーツにおける不正行為が発生する仮説を立てました。スポーツでは、「勝たなければならない」「結果を出さなければならない」「上層部から圧力」「より強い刺激や興奮」「金銭的な見返り」といったものが動機・プレッシャーになり得ます。機会については、「外部の目が入らない・見られていない機会・空間」「審判から見えてない場面」「誰にも見られていない空間」が少なからず存在します。さらには、「他のアスリートもやっている」「慣習である」「大ごとにはならない」「軽く考えてしまった」などは正当化の理由になります。この仮説を考える上で、

最近注目すべき研究結果が発表されました。それはドーピング行為がなぜ起きるのかという研究です。海外のエリートサッカー選手約1500名を対象に行った調査で、「自分が伸び悩んでいてパフォーマンス向上に努めている時」及び「ケガからの復帰に努めている時」という2つのシナリオで、どちらがドーピング禁止物質を使用するか、アンケート調査を行いました。その結果、自身の競技力向上よりも、ケガからの復帰の方がドーピング行為をしやすいということが分かりました。そして、ドーピング行為の決め手は罪の意識であり、「所属チームのためである」とか「他の選手もやっているから大丈夫である」とかの正当化によって罪の意識を減らし、ドーピング行為を犯すというメカニズムが明らかになりました。さらに、確固たる道徳的価値観が確立しているアスリートは、何があっても自分を正当化することはなかったという結果も示されました。したがって、その高い道徳観・倫理観を養うことが重要になります。スポーツにおける教育機能を考える上で重要な知

見であると思います。

さて、話を戻します。先に述べました不正のトライアングルに基づく仮説をもとに、JSCではスポーツ・インテグリティに係る問題発生リスクを観察するための指標を開発し、競技者及び指導者に対するモニタリングを実施しています。モニタリングの結果を見ると、興味深い傾向が見えてきました。暴力やハラスメント、ドーピングなどのリスクを指導者に対するモニタリングを実施しています。モニタリングの結果を見ると、興味深い傾向が見えてきました。暴力やハラスメント、ドーピングなどのリスクを指導者に対するモニタリングを実施しています。モニタリングの結果を見ると、興味深い傾向が見えてきました。暴力やハラスメント、ドーピングなどのリスクを指導者に対するモニタリングを実施しています。

□まとめ

今後、直面する人口減少時代におけるスポーツについて考えてきましたが、本日のお話をまとめたいと思います。これからの人口減少時代において、スポーツには極めて大きな意義があり、今後は個人的価値のみに留まらず、社会的価値にも目を向ける必要があります。これまでスポーツの恩恵を受けていない人々、特にスポーツ未実施者に対してどのようにスポーツの価値をどう届けるかが重要です。そのためには行動変容理論やゲートウェイ、住居環境、フィジカルリテラシーといった最新の理論や知見を活用して、従来の取り組みに加えて新たなア

プローチを行っていく必要があります。スポーツイベントには、地域を活性化する経済的効果、社会的効果、環境的効果があり、その効果を最大化するための工夫が必要です。単に、イベントを開催するだけでなく、それに合わせた様々なプログラムや仕掛けが必要です。運動部活動は日本のスポーツシステムの中で重要な役割を有していますが、今後はスポーツ未実施者や子供、保護者を視野に入れ、新しい役割や機能をもつことが必要と考えられます。スポーツが今後の社会における役割を果たす上で、スポーツ・インテグリティはその前提となります。あらゆるスポーツ場面においてスポーツの安全性・公平性・公正性を確保するためのプログラムやマネジメント、システムが必要です。

ご清聴ありがとうございました。

3. 質疑応答

【小澤】和久先生、ありがとうございました。今回のキーワードとして、私の中に残ったものがフィジカル・リテラシーとスポーツ・インテグリティというものになります。フィジカル・リテラシー、つまり、スポーツをしたい意欲とか動機の醸成という観点でお話をされたと思います。そのときに、新規のスポーツ参加者の確保という観点が展開されていたかと思うんですけども、すでにスポーツを実施していた方に、そのまた社会人になられてスポー

ツを辞められた後にまた復活する、剣道の世界ではリバイバル剣道とも言われていますが、スポーツ人口や剣道人口の確保ということも考えられるのではないかと思います。

そこで、政策の中で実施者以外のリバイバル剣道の確保について何か検討や知見等ございましたら教えてください。

【和久】一度、スポーツから離脱した人がスポーツに戻ってくるという点で、その典型例として女性のスポーツ参加が挙げられます。特にトップスポーツでは、女性アスリートが結婚や妊娠を機に引退してしまうことは多いです。妊娠・出産後の競技復帰を支援する方策として、妊娠期間中や出産後のトレーニングについて研究が行われています。また育児をしながらトレーニングを継続できる環境づくりも重要視されています。その他、ママ同士でネットワークを構築し、情報交換を促進する仕掛けづくりも取り組まれています。

【大石】今日は貴重なお話ありがとうございました。一度、スポーツを辞めたとき、その戻るきっかけがなかなか掴みにくいということがあります。剣道においては、昔、「全国家庭婦人剣道大会」というのがあって、あの大会が復帰のきっかけになった人も多くいたと思います。ただ現在では、それが無くなってしまったので、その復活を希望する声はしばしば聞こえてきます。女性のアスリートを活性化するイベントだけで



なく、普通のレベルの愛好家においても、その復帰につながるような機会やイベントができるとうごくいいなと感じています。そこで、和久先生の政策のレベルの中で、実際にこういった内容のイベントで、ターゲットは女性の復帰にかかってくる具体的な動きはあるのかどうかお聞きしたいです。

【和久】私が知る限りでは、そうした国内の事例は記憶にありません。しかし、産後、体型や身体諸機能を戻すために少し体を動かしてみるなど多様なきっかけがあると思います。そのような多様なきっかけをイベント化するのは有効な手段になると思います。海外の事例で、そういったイベントの情報を目にした気がします。

【太田】今日はありがとうございました。現在、私が附属高校に関わっているので、高校生のことを考えていると、これからこの子たちはどうなるのだろうかと考えさせられました。

部活動についてですが、教員の働き方改革をから考えると、部活動の時間を減らさなければならぬ状況にあると思います。しかし、部活動が運動未実施者へのある種のゲートウェイになっている、もし部活動がなくなれば、お

そらく青年期のスポーツ人口は激減すると思います。部活動を社会体育の中で地域総合型スポーツクラブのほうに持っていくのか、あるいは外部指導員が協力し学校の中で行っていくのか、どの方向が良いのかということも、私自身迷っています。

また、もう1つの部活動の課題として、教師になる動機として部活動の指導者になりたいと回答する例があります。本学でも、学生に「なぜ先生になりたいのか」を聞いたときに、部活動の顧問になりたい、子どもたちにスポーツを教えたい、という社会科や理科を専攻する学生が沢山います。このような中で、部活動は今後どういうふうに進んでいけばいいのだろうか、また部活動にどういう意味があるのだろうかと思いますが、先生のお話をお聞かせいただければと思います。よろしくお願いします。

【和久】運動部活動というシステムは非常にユニークで、海外にはない日本独自のシステムです。私は、日本の運動部活動システムは重要と考えています。また、残していくべきと考えていますが、人口動態や教員の負担を考えると、すべて教員で賄っていくには限界があるので、外部指導員の活用は避けられないと考えています。ただ課題は、外部指導員が正しい知識と正しいスキルを有しているか、適切なコーチングができるか、学校教育の一環としての教育的側面の確保など質の保証にあると考えます。そのための研修機

会の充実を図ることが重要ではないかと考えています。

もう1つ、個人的に考えている運動部活動の課題は、行動変容ステージや部活動へのニーズが異なる人々（生徒、保護者）が1つの部活動というプラットフォームに参画していることです。本当に強くなりたいという生徒（保護者）もいるし、まあまあ楽しめたら良いという生徒（保護者）もいます。体を動かして健康になれば良いという生徒（又は保護者）もいます。またパフォーマンスや技術の水準が高い生徒もいれば、低い生徒もいます。多様なニーズやレベルの生徒（保護者）が混在しています。それぞれの運動部活動が、どういう人たちをターゲットにしているかをオープンにする必要があります。運動部活動のマネジメントがとても大事になっているのではないかと思います。

【太田】働き方改革を考えたときに、教員定数があるので、その本務はやはり教科教育だと思います。しかし、教科外活動、課外活動、それから行事などを考えたときに、もう少し教師を加配して仕事量を分散することで、部活動もある種コントロールできるのではないかと考えますが、このような意見はスポーツ庁にはないのでしょうか。

【和久】私が知る限りでは分かりませんが、財源の問題が強く関係しますので、結論が出にくい課題ではないかと思えます。

【木原】先生のお立場として、国

政的なまた日本全体的な立場としていらっしゃっているので、お答えしづらいところがあるとは思いますが、少年の人口がどんどん減少している中で、例えば、剣道が他の競技と比べて、非常にアピール度が薄くて、これから剣道をやろうという若い人が少なくなってきたと私は思います。日本においては、剣道のような特殊な競技が多くあるのですが、これからの剣道の発展のために少子化の時代に取り組んでいく課題であったり、何か良い事例があれば、何かご紹介いただければと思います。

【和久】直接にご参考になるかは分かりませんが、ある競技団体の取り組みが参考になるかと思っています。その競技団体は、その競技が人の人生の中でこういう価値があるということを団体のメッセージとして公表しています。これを通して社会に貢献していくというメッセージを組織として公表しています。それぞれの競技の本質的な価値や意義、面白さを明確化し、どう社会に貢献していくか発信していくことは重要と考えています。

【酒井】今日は、あらゆる研究結果に基づいて、エビデンススペースでお話いただいて、流石だなあと思いました。今後、剣道専門分科会として、今日のお話を剣道の問題に落とし込んだ時、人口減少時代に学会として、やるべき研究課題があれば、教えていただければと思います。

【和久】武道政策の研究はほとん

ど見当たらないと思います。スポーツ庁を設立するときも、武道をスポーツに入れるのか入れないのかというのが議論されました。しかし、剣道や柔道などの武道を政策としてどうするのかという研究は非常に少ないので、今後充実させる必要があるのではないかと考えています。また、武道をすることによってどういう効果があるのかを明らかにした研究は見当たらないので、今後重要ではないかと思っています。

【酒井】武道の何がいいのかっていうものを証明した研究は意外とないんですね。やはり、先生がおっしゃったことは重要だと思いました。ありがとうございました。

【和田】今日は貴重なお話を聞かせていただいて、ありがとうございました。経営学科で地域政策を教えているので、非常に勉強になりました。今日のお話の中で、冒頭のキーワードのイノベーションというのがあったと思いますが、私の中でどのように解釈・理解したらいいのかということで、質問させていただきます。1つはスポーツそのものの革新としてのイノベーション、もう1つは人的資本あるいは個人的価値ということで、スポーツを行う個人のイノベーション、もう1つは社会関係資本あるいは社会的価値ということで、スポーツを行う社会的価値のイノベーションの3つかと思いますが、それで間違いないでしょうか。また、この3点がどのような関係性を持っている

のでしょうか。

【和久】はい、ありがとうございます。核心的な質問だと思います。これまで行ってきたスポーツの取り組みやアプローチは意義がありますので、それはそれで継続する必要があると思います。しかし、今後、新たに取り組まなければならないイノベーションは、顧客のイノベーション、顧客に対するアプローチのイノベーション、及び顧客に対するプログラム、つまりサービスコンテンツのイノベーションと考えています。

【有田】最近、e-Sportsが話題になっています。剣道とe-Sportsを融合することが可能になる時代が来るのではないのかなと思いますが、e-Sportsは今後どうなっていくと考えていますか。

【和久】ホットピックスです。実は、e-Sportsについては、国際スポーツ界でも結論を出せていません。IOCをはじめ国際スポーツ界が危惧しているのは若者のスポーツ離れです。その若者の人気が高いのはe-Sportsです。それを、オリンピック種目に入れるかどうかについては未だ議論しています。さらに、e-Sportsは経済効果も非常に大きいものですから、持続性や経済的基盤という意味でも無視はできないというのが現状です。あまり結論を早急に出さないというのが現状と認識しています。スポーツ庁でも同様に検討を継続しているという段階です。

【小風】大学の研究者でもありませんし、剣道の専門家でもありま

せんが、いろんな経緯から競技団体、全日本剣道連盟とか、日本オリンピック委員会の理事ということで活動させていただいております。その観点から1つ、ご示唆をいただければと思います。

ここにおられる方には指導的な立場におられて、また剣道の普及指導や各団体でのいろいろな役割を果たしている方が多いかと思えます。競技人口の減少によって各競技団体は財政的に非常に厳しくなる。そうすると、各競技人口を増やすためにいろいろな施策を行わなければならない。そうすると、さらに財政が苦しくなるということで、これが負のスパイラルになってしまふ。財源は限られているわけですから、その中で優先的にやっていかないといいことを考えなければいけない。これは各競技団体の共通の課題ではないのかと思えます。

競技人口という点で見ますと、今、外国からも大勢の方がいらっしゃっています。また、共生社会ということになりますと、女性の方はもちろん、障害を持たれる方、スポーツ未実施者の方たちに、どうやったら剣道なりあるいは他の競技、スポーツにはいっていかどうかを考えなければならない。こういう政策が重要なんじゃないかと思えます。こういうテーマがこの学会で取り上げられたということは、共生社会における剣道の良いテーマだったのかなと思えます。

【和久】多くの競技団体の財政基盤は弱いのは実情と思えます。比

較的に財政的基盤がしっかりしているのはサッカーなど一部だと思います。競技団体の主な収入源は、会員からの会費収入、大会チケット収入、放映権収入です。新たな財源を生み出すビジネスモデルを考える必要があると思えます。一方、武道の場合、外国人の武道ツーリズムが人気です。この辺りをどうビジネス化していくかも検討の余地があると思えます。

【数馬】ゲートウェイということにとっても興味があります。今回のオリンピックが一つの契機になって、所属先の工学部や情報学部の先生がスポーツとAIに関する研究をやり始めています。剣道専門分科会の研究においてもAIの力をかりることは面白いでしょうし、ゲートウェイという観点からすると、一般の方々に剣道の身体知や面白さを体験以外の手法で伝える方法もあるのかなと思えました。先程、AIというお話がありました。政策の中でAIの具体的な活用事例があれば教えていただければ幸いです。

【和久】ハイパフォーマンススポーツの領域では活用が始まっています。試合時の様々なデータをAIに分析させて相手の攻撃パターンを予測するといったことはすでに行われています。政策的にもAIを活用していこうという動きはあります。大規模スポーツイベントにきた人たちの動きは経済効果に結びつくので、政策的にもより取り組まれていくと思えます。その点では、各地域にアリ



ーナやスタジアムがありますので、その中での観客のビッグデータを活用する価値は十分にあると思えます。民間企業やデータ解析の専門家など、異分野との連携が重要と考えます。

【百鬼】いわゆる少子高齢化に対して、全日本剣道連盟は予算の減少や人口の減少も含めて考えています。やはり高齢化の部分で、それに関してパーセンテージがさらに上がっていくはずで

私の印象ですけれども、年寄りには年寄り、子どもは子どもといった階層化が進んでいるように見えます。社会構造全体を見ると、やっぱり3世代同居で、おじいちゃんがいる、お父さんがいる、子どもがいると。そういう年齢の枠をつなぐような形のイベントや政策といったものが、これから社会においては極めて重要になると思えます。段々と価値観そのものが、効率化というキーワードに引っ張られていって、非人間化というのが進んできていますよね。オリンピックで金メダルを取れるかどうかで評価されてしまふとか、その弊害が出てくる。もう1回、人間臭さとか、人間の回復とか、そういう部分を大切に、合わせて持つておかないと、今の

人間社会というのはものすごくおかしくなってしまう。逆に言うと、日本は諸外国に比べると、そういう部分を持っていると思うので、そういうものを少し政策に反映するような、そういうことができたかなというふうに思っているのでぜひ、ご一考いただければと思います。

【和久】ありがとうございました。剣道も含めて武道が社会関係資本の視点でどういった効果があるのか見直し、そういった視点で取り組むことは重要だと思います。

参考にさせていただきます。ありがとうございました。

今日は、どうもありがとうございました。皆さんの顔を久しぶりに拝見させていただき本当にうれしく思います。引き続き、よろしく願い申し上げます。

【長尾】和久先生、ありがとうございました。オリンピックのトリクルダウン効果幻想からそろそろ離れた方がいいということをお立場があるにもかかわらず、少し踏み込んでおっしゃっていただきました。私のように熊本出身

で、非常に剣道が盛んだった地域でさえ、中学校では5人の団体チームを組めなくなっているような状況もあります。その一方で、日本武道館では少年の全国大会が盛大に開催されていて、まだまだ剣道いけるんじゃないかと思ってしまうようなところもあります。

今日は、極めて綿密なデータを示しながら、今後、我々が進むべき方向をお示しいただき、本当にありがとうございました。

令和2年度日本武道学会第53回大会剣道専門分科会企画講演

剣道と新型コロナウイルス感染症とを どのように共存させていくのか？

講師：宮坂 信之 氏（東京医科歯科大学 名誉教授）

司会：廣野 準一 氏（信州大学 講師）

日時：令和2年9月8日（火）14:30～16:00

場所：Zoom ミーティング

1. イントロダクション

【廣野】本日、司会を務めさせていただきます信州大学の廣野です。慣れない形式でお見苦しい、お聞き苦しい点があるかとは存じますが、どうぞよろしくお願いいたします。

本日は「剣道と新型コロナウイルス感染症とをどのように共存させていくのか？」というテーマで、宮坂先生にご講演いただきます。まずは宮坂先生の略歴をご紹介します。宮坂先生は長野県上田市のご出身で、長野県上田高校在学時には剣道でインターハイ出場を果たされています。東京医科歯科大学医学部を卒業後、カリフォルニア大学・テキサス大学医学部に留学、帰国後に東京女子医科大学、東京医科歯科大学で勤務され、東京医科歯科大学副学長、医学部附属病院長などをご歴任されました。現在も東京医科歯科大学名誉教授、全日本剣道連盟医・科学委員長等、様々なフィールドでご活躍をされています。剣道教士七段で、今回の全日本剣道連盟感染拡大予防ガイドラインの作成や熱中症防止への取り組みにおいて中心的な役割を務められています。それ

では、宮坂先生ご講演の方よろしくお願いたします。

2. 講演

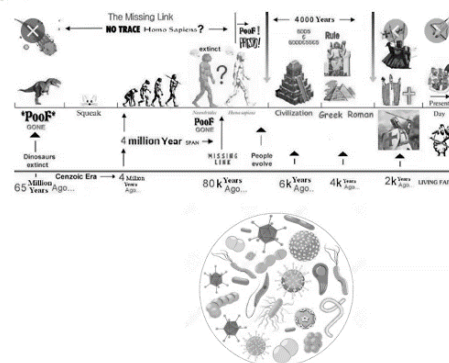
【宮坂】東京医科歯科大学の宮坂です。よろしくお願いいたします。今日は「剣道と新型コロナウイルス感染症とをどのように共存させていくのか？」というテーマでお話し、皆様と一緒にこのテーマについて考えていきたいと思っております。私は全日本剣道連盟の医・科学委員長ですが、本日はその立場を離れて学問的にご紹介をしたいと考えております。

これは人類の数千年以上の長い歴史のスライドですが、感染症というのはその中で一定程度

役割を果たしてきたことが分かります。例えば、天然痘に関してはインカ文明やアステカ文明が滅びた原因となっています。これは、スペイン人が持ってきた天然痘が広まったことが原因です。中世の時代には、ペストという病気が非常に流行り、国を滅ぼしかねないこともありましたが、マラリアも同様です。ここには書いてありませんが、HIV、いわゆるエイズもアフリカ地域では非常に流行りました。それから、今から100年ほど前の第一次世界大戦のときには、スペイン風邪が流行り、これも非常に有名になりました。それから約100年が経ち、新型コロナウイルスが世に流行し、問題を起こしています。本日

人類の歴史と感染症

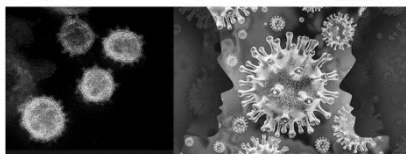
- 天然痘
- ペスト
- マラリア
- スペイン風邪
- 新型コロナウイルス
- その他・・・



📄🔍🗨️👤

講演は写真のように Zoom ミーティングを利用し、パワーポイントのスライド表示によって進行された。参加者は50名と盛況であった。

新型コロナウイルスとは？



はそのお話をしたいと思います。

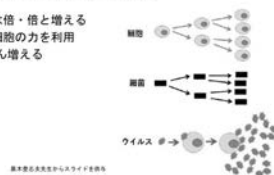
まず、新型コロナウイルスとは？というテーマでお話を進めます。こちらのスライドは新型コロナウイルスの顕微鏡写真になります。コロナというのは、もともとはラテン語で「王冠」という意味です。太陽の周りに「フレア」というものがありますが、それがコロナのように見えるからというのが英語名の由来です。そして、そのような形に似たウイルスであることから「コロナウイルス」と名付けられました。

新型コロナウイルスはRNAウイルスで、大きさは100ナノメートル（1mmの1万分の1）で目に見えません。このウイルスは、発熱や咳・痰などの症状を引き起こし、医学的に言うと呼吸器感染症を引き起こすことが知られていました。そして、ヒトに感染するコロナウイルスとして知られているものは6種類くらいです。その中には、新聞紙上で有名になったSARS（重症急性呼吸器症候群）やMERS（中東呼吸器症候群）があります。世界的には大騒ぎになりましたが、当時、SARSもMERSも日本には入ってこず、韓国で止まりました。そのような経緯があり、今の日本の対策が不十分と言われています。コロナウイルスは、一般の風邪の10%～15%を占めています。流行期でも

35%程度で、普通の風邪のウイルスとしてすでに世に存在していました。そこに新型コロナウイルスという新しいウイルスが入って来たということです。

細胞・細菌とウイルスの違い

- 細胞と細菌は倍・倍と増える
- ウイルスは細胞の力を利用してどんどん増える



ウイルスというのは細菌とは異なります。細菌は自分で増殖する装置を持っているため、倍々で増えていきます。ところが、ウイルスというのは、自分で増殖をすることができません。細胞に感染をして、その細胞の増殖装置を使って、初めて増えることができます。この点が細胞・細菌とウイルスの相違点です。ウイルスそのものは、感染した細胞の増殖能力を借りて増えていくということになります。

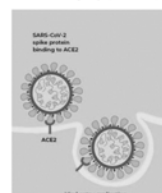
続いて、新型コロナウイルスの特徴についてです。まず、季節性についてです。インフルエンザウイルスを例に挙げると、だいたい11月頃から流行り始めて3月くらいには収まります。新型コロナウイルスを見てみると、現状で第二波と考えられるものがきておりますし、季節性はあまりないと考えてよいと思います。

次に、うつりやすさについてです。大人と子どもを比べると、子どもの方がうつりにくいと言われています。しかし、家庭内では子どもに感染することが確認されていますので、必ずしもそうとは言えません。また、1番重

要な問題は、感染してしまった場合です。約8割の人は自然に治りますが、約2割の人が重症化をします。中でも、高齢者（医学的には65歳以上）や基礎疾患がある人は重症化しやすいことが分かっています。重症化すると、自分で呼吸ができなくなり、レスピレーターやエクモ（人工呼吸器）が必要になるほどになったり、場合によっては死亡する方もいらっしゃいます。また、軽症だと思っていたが、急性増悪する人もいます。

ウイルスの排出についてみると、無症状でもウイルスを出している場合があります、発症の2日前からウイルスを出しています。これは、インフルエンザウイルスとの決定的な違いです。インフルエンザウイルスの場合には、症状が出ている人だけが他人にうつします。したがって、そのような人達をどのように見つけ出すかが重要なポイントになります。現在の日本には明らかに第二波が来ています。ワクチンや治療薬がない現状を考えると、第3波、第4波は来る可能性は非常に高いと思います。ただ、そのピークが今回と同じ山（高さ）かどうかは、今のところ分かりません。

SARS-COV-2ウイルスの受容体はACE2

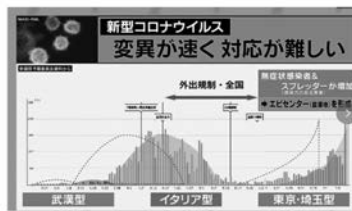


ウイルスの受容体=ACE2
アンギオテンシン転換酵素2

次に、新型コロナウイルスが生体に入るときにどのような経路を辿るかについて、お話をします。

医学的には、ウイルスの結合する分子は受容体と言います。新型コロナウイルスの場合、ACE2（アンジオテンシン変換酵素2）がウイルスの受容体となります。このACE2は、もともとは違う目的で使っていたものをウイルスがちゃっかりと横取りをして使ってしまう、ウイルスは最終的に細胞内に入り込んでしまいます。このACE2を発現する細胞は、気道上皮、消化管上皮、血管内皮細胞、脂肪細胞に多く存在します。例えば、空気（呼気）の通り道である気道上皮を通してウイルスが入り込むと肺炎になりやすいと言われてますし、消化管上皮から入り込むと10%前後の人は下痢をします。また、新型コロナウイルスも血栓症を引き起こすと言われてます。これは血管の裏打ちをしている血管内皮細胞とウイルスが結合できるためと言われてます。それから、脂肪細胞にもACE2を受容する細胞があるため、高度肥満の方もリスクが高いと言われてます。脂肪細胞はアディポカインなどのサイトカインを出すことが分かっています。また、全身の免疫系の細胞は炎症性サイトカインという物質を出し、が分かっている、それに拮抗する抗炎症性サイトカインがあることも分かっているのですが、新型コロナウイルスに感染すると全身の細胞がサイトカインを出し続けてしまうサイトカイン・ストームが起こり、死亡する例も報告されています。以上のことから、新型コロナウイルス

はウイルスの受容体を持っている細胞を介して、組織に感染をされると言われています。

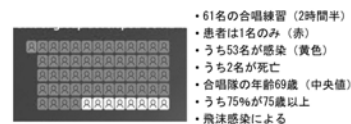


次に、ウイルスの変異についてお話をします。このウイルスはもともと中国の武漢で流行ったもので、ダイヤモンドプリンセス号（クルーズ船）での感染症も武漢からやってきたものです。当時、そのウイルスは一旦収まりましたが、イタリアで流行っているウイルスを旅行者や帰国者が日本に持ち込んだと言われてます。なぜ、イタリアが多いかという、実はミラノを始めとして、中国人がとても多いという背景があります。中国の武漢から入ってきたウイルスが突然変異をして日本に入ってきたと考えられます。その後、日本は外出規制が全国で行われましたので一旦収まりましたが、現在はまた増えています。このウイルスは東京・埼玉型と言われてます。その中には、無症状の感染者やスーパースプレッダーがいるということが分かっています。このように、少なくとも、これまでに3つのウイルスが順番に流行ってきたと考えられます。

新型コロナウイルス感染症の感染方法について、飛沫感染、接触感染、その他の大きく3つに分けられます。その中でも飛沫感染が全体の約8割を占め、残りは接

触感染や便を介したものなどもあります。実際に剣道を行うときには飛沫感染と接触感染を防ぐということを考えればよいと思います。

アメリカの合唱練習の例



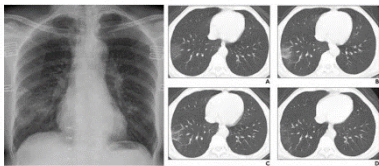
このスライドは飛沫感染の例になります。アメリカで61名の合唱練習をしたときに、53名が感染した事例が報告されています。図の左上の1名が感染してただけですが、2時間の練習で53名に感染をし、うち2名が亡くなりました。合唱隊の平均年齢は69歳で、合唱隊の75%が75歳以上でした。この他にも、ヨーロッパでこれに似た100名を超える感染クラスターも報告されていますし、日本国内でもカラオケで感染するということが報告されています。それらは、飛沫の中でも小さい飛沫によって感染が起こるとされています。これらはマイクロ飛沫として注目されています。高齢者の方は十分に気をつけなければならないと思います。

新型コロナウイルスによくある症状は、発熱、空咳、体がだるくなるといった普段の風邪の症状から始まります。鼻づまり、鼻水、息切れ、喉の痛み、体が痛い、下痢などの症状などもあります。これらの症状からは新型コロナウイルス感染症なのか、風邪なのかは軽症のときには明確には

分かりません。全体の 20%が重症化しますが、その多くの方は肺炎です。肺炎の状態が悪化して、急性呼吸ひっ迫症候群（ARDS）になると非常に危険で、呼吸不全で死亡してしまうこととなります。死亡率は、世界的には4~5%とされていますが、日本は1.9%です。インフルエンザでは、日本ではワクチンがありながら1,000万人近くが感染しますが、死亡者は5,000~6,000人とされていますが、今年にははるかに少ないようです。新型コロナウイルスが原因で亡くなった方は国内で1,700人ですから、数だけ見たらインフルエンザウイルスの方が多ということになります。

新型コロナウイルスは肺炎が

肺炎が特徴！



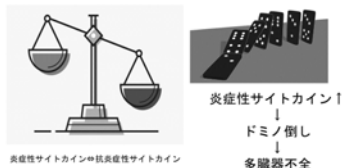
急性呼吸ひっ迫症候群（ARDS）→呼吸不全



特徴的です。スライドにあるレントゲンとCT画像の淡い影が見えますが、これが肺炎です。2割ぐらいの人はこのような影が出てきても、自然に消えてしまいます。悪化すると、急性呼吸ひっ迫症候群となり、呼吸不全で死亡します。こちらは、インフルエンザでも起こり得るのですが、特に新型コロナウイルスではこのような病

態が多いのが特徴です。

サイトカイン・ストームと多臓器不全



サイトカインについて、サイトカインの中でも炎症によって誘導されるものを炎症性サイトカインと言います。通常、体はそれに反応して抗炎症性サイトカインを出しますので、両者がバランスを取れています。しかし、新型コロナウイルス感染症の場合には、このバランスが取れなくなってしまい、免疫細胞が活性化した結果、炎症性サイトカインが出続けてしまい、ドミノ倒しのようになって多臓器不全になってしまいます。呼吸不全だけでなく、肝不全、腎不全など様々なことが起きた死亡例があるため、注目されています。

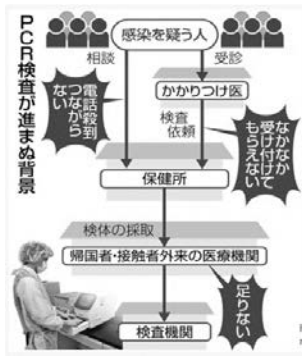
新型コロナウイルスの特異的な症状ですが、かなりの人に嗅覚異常、味覚異常があり、これはインフルエンザでは出ない症状です。

どういう人が重症化しやすいかという、まずは高齢者です。高齢者は医学的には65歳以上と定義されますが、ここには60歳以上が入ります。高度肥満の方も注意が必要ですが、ここでいう高度肥満とは、100kgを超えている人のことを指しています。それから喫煙者（ヘビースモーカー）、特に1日に2箱以上40本以上吸っている人になりやすいと言われています。それから基礎疾患の

ある人の中でも、糖尿病の人が注目されています。軽症の方からインスリンを使わなければいけない重度の方までいますが、糖尿病の方は要注意です。また、心臓に病気のある人も注意が必要です。例えば、心筋梗塞、狭心症、高血圧などです。高血圧のある人は多いですので要注意です。それから肺に病気のある人、いわゆる肺気腫の方はなりやすいといわれています。あるいは、人工透析を受けている方、それから、抗がん剤などを服用している方々は免疫が落ちていきますので、新型コロナウイルスにかかりやすいということです。このような症状や基礎疾患などに該当する方の中で、剣道をする場合は要注意ということになります。

続いて、新型コロナウイルスの検査のお話をします。新型コロナウイルス感染症の検査方法は、PCR（ポリメラーゼチェーンリアクション）法と言いますが、普通は喉や鼻を綿棒で擦って、そこにある遺伝子を増幅します。増幅して検出するまでだいたい6時間かかりますので、これは検査法の問題点でもあります。また、ウイルスが少ないと検出できず、検出率は70%とされています

PCR検査の検体採取法ですが、対面式で行うと、患者がくしゃみをした場合、検査者に飛沫が飛びます。今は、防護服などで防御しているので大丈夫ですが、それが

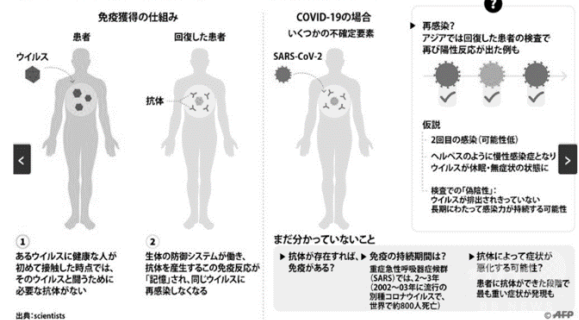


PCR検査ができない！

- ・時間が掛かる
- ・検査機関に限られている
- ・検体採取・運搬が大変
- ・防護服などが不足
- ・医療崩壊のおそれがある
- ・検査試薬や綿棒が不足
- ・その他

<https://www.tokyo-np.co.jp/article/national/list/202004/CK2020041502100051.html>

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) と免疫システム



出典: scientists

<https://www.afpb.com/articles/-/3279544?page=2>

まず、これらが、PCR 法の目詰まりの理由です。

普通は熱が出ればかかりつけ医に行けばよいのですが、新型コロナウイルスでは保健所を通さなければなりません。厚生労働省は患者に保健所への電話を促し、保健所から帰国者・接触者外来の医療機関に連絡をして OK が出ると初めて検査ができる仕組みになっていました。しかし、感染者やかかりつけ医から保健所へなかなか電話が繋がらず、検査ができないという状態が起っています。これはあくまで感染の疑いがある人や症状がある人への対応です。そして問題は、無症状で感染の有無を調べたいという人は対象にならないということです。新型コロナウイルスは指定感染症になっていますから、症状がある人は無料で検査や治療をしてもらえます。しかし、症状がない人が PCR 検査を受けようとすると、私費診療になります。高いところだと 50,000 円ぐらいの費用がかかります。実際に検査をして、そのとき陰性でも、後から陽性になることもあります。ですから、1 回の検査が高額となると、そう何回もできません。お隣の韓国では、国が全部お金を負担して、

PCR 法の検査をドライブスルー方式で行っています。また、最近では唾液を使う検査方法も開発されています。体内にウイルスが入ると、それが抗原になり、ウイルスに対して抗体ができます。SARS-CoV-2 に感染すると、様々な種類の抗体ができます。その抗体が、必ずしも良いものができるかどうかは分かりません。また、その抗体がどのくらいの期間、効果があるか分かりません。まずは抗原ですが、インフルエンザ感染のときには、その場で迅速に抗原検査をしてくれます。それをポイントオブケアと言いますが、そういったことを新型コロナウイルスでもやろうという取り組みが進んでいます。PCR 検査と抗原検査の比較ですが、PCR 検査は、ウイルス特有の遺伝子配列を検出し、所要時間は 6 時間前後掛かります。また、分析には専門技術が必要ですが精度は高く、地方衛生研究所などで検査ができます。一方、抗原検査はウイルス特有のたんぱく質を検出するもので、所要時間: 15 分前後。特徴は、簡易だが精度は劣る (PCR 検査の 20 倍感度が悪い)、ただし検査が簡便でできるのが特徴です。現在の問題点とし

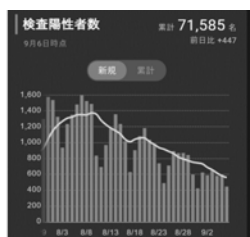
ては、感度が低い検査を使えるのかという点ですね。これから外国人が日本に入国してくる際には PCR 検査より、抗原検査が向いているだろうと思います。近いうちに、新型コロナウイルスとインフルエンザの抗原検査が同時にできる検査の認可もされようとしています。

次に、抗体検査のお話をします。抗体検査は、プロ野球などが選手に対して行いました。この検査の利点は、血液検査で抗体の有無が分かり、迅速で簡便で安価であるということです。また、すでに感染歴があるかどうか分かれます。ただし、感染歴分かるものの、現在感染しているかどうかは分かりません。ちなみに、抗体ができるまでは 2 週間かかります。そのため、早い段階で血液を採ってしまうと、抗体ができていない人もいますし、病気を見逃す可能性があります。他のコロナウイルス抗体を検出してしまう可能性も否定はできません。また、抗体を持っていても、それが悪さをする可能性も否めません。最近、分かってきたことですが、悪化する人は、軽症の人と比べて抗体量が多い傾向にあるので、抗体を持っていれば良いというわけではない

ようです。悪玉の抗体ができて、その結果、容態が悪くなる可能性もあり、非常に厄介です。ワクチンを打って抗体ができれば良いのかというとそうでもないのです。ワクチンを打って、悪玉の抗体ができてしまったら困ります。つまり、善玉の抗体ができなければならないということです。しかし、日本人は抗体ができない人もいますし、できたとしても一過性の人もあります。検査をしたところ、だいたい0.1%~1%、しか日本人は抗体を持っていないということが分かっています。例えば、ニューヨーク州では10%前後の人達は抗体を持っているとされています。イタリアのように非常に感染が多いところでは、30%も抗体を持っているともいわれています。

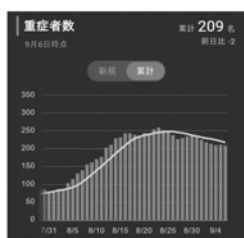
次に、無症候陽性者のお話をします。無症候陽性者とは、症状がないにもかかわらずウイルスを出している人のことを指します。つまり、新型コロナウイルスの場合には、症状が全くないにも関わらず、ウイルスを出している人が多くいるということです。このようなことは、インフルエンザウイルス感染者には全くありません。新型コロナの場合は、発症する2日前からウイルスを出してから発症する人もいます。しかも、このスーパースプレッダーと呼ばれる人は、1人から10~100人程度に感染させることができます。だから、この無症候陽性者を見つけることがとても大事なポイントになりますが、現在の日本のシ

テムでは、症状がなければ検査ができないので、このような方を見つけることは難しい状況です。昨今、新宿や池袋とかで接待を伴う飲食店のホスト達が問題になったわけですが、この人たちの多くは無症候陽性者でした。日本の課題としては、PCR検査で無症候陽性者を何としても見つけなければならないということです。



PCR検査陽性者数の増加は鈍化している

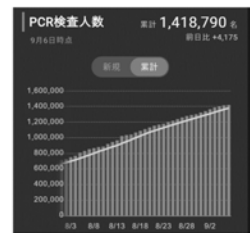
新型コロナウイルスの感染状況の現状をお話します。9月6日現在、日本国内のPCR検査で陽性になった方は7万人います。



重症者も頭打ち傾向

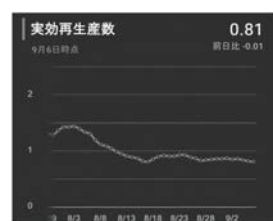
重症者は頭打ちになってきてはいますが、我々医療機関から見ると、新型コロナウイルスなのかインフルエンザなのか、はたまたそれ以外なのかというのはすぐには見分けられません。ですから、最悪の場合を想定して診療しますが、そうすると非常に手が掛かります。重症者の数が医療機関の破綻に繋がることは大いにありえます。沖縄では感染者が増えてきていますが、新型コロナウイルスに罹患した患者さんを診ることができる病院が多くありませんので、医療破綻しかねない状態

が続いていました。



PCR検査は少しずつ増加はしているが...

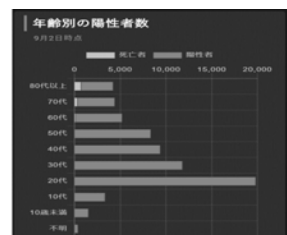
また、PCR検査の人数は累積が増えてきていますが、これの10倍以上できないと無症候陽性者を見つけることはできません。これが現在の日本の課題となっています。



実効再生産数は横ばいだが1以下

実効再生産数=一人が何人にうつすか?

それから、実効再生産数という数値がありますが、この実効再生産数は1人から何人にうつるかという数値を示しています。2近くあった数値が最近では1以下の0.8程度に留まっていますので、収まりつつある、収束しつつあると考えてもよいと思います。しかし、いつ実効再生産数が1以上になるかはまだ分かりません。



20代が多い
60歳以上の高齢者に死亡率高い

ここからは、年齢のお話をします。日本国内で感染者の多い年代は、20代です。30代、40代、50代と減っていきます。そして、60代、70代、80代と感染者の数は少ないですが、死亡者数が60代から増えていることが問題になっています。生涯剣道、高齢者剣

道といいますが、あるいは剣道で八段を持っている範士の先生や教士の先生は多くが60歳以上です。ですから、この人たちがうつってしまうと場合によっては、最悪の場合、亡くなってしまうこともあるということを考えなければなりません。

30代	0.1%	60代	1.7%
40代	0.1%	70代	5.2%
50代	0.4%	80代以上	11.1%

※厚生労働省のデータに基づく
(4月19日発表の時点、厚生労働省発表より)

<https://www.who.int/news/item/19-04-2020>

年代別の死亡率を見てください。このデータは7月中旬にまとめられたデータですが、今も傾向は変わりません。30代、40代の年代別死亡率は0.1%、つまり、1,000人に1人しか死にません。しかし、40代から50代になると、0.1%から0.4%になり。50代から60代になると、さらに4倍に増えています。60代から70代だとそこからさらに3倍に増えていきます。70代から80代になると、そこからさらに2倍になります。30代の0.1%と比較すると、80代の11.1%は、100倍亡くなりやすいということになります。ちなみにイタリアの高齢者介護施設では、80代の方はほとんど亡くなっています。ですから、高齢者はこの病気に絶対になってはいけません、ならないようにしないといけないということです。世間では、8割治るじゃないかと言われてますが、それは20代、30代などの若い人達だけです。60代以上の人は絶対になってはいけません。そのために三密を避けるとか、マ

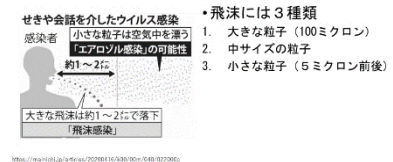
スクをするとか、接触感染を防ぐために手を洗いなさい、うがいをしなさいといわれています。三密を避ける、手洗い、咳エチケット、マスクの着用、換気などが新型コロナウイルス感染症予防の方針に示されているのはそのためです。

簡単に、新型コロナウイルス感染症に対する治療薬の話をしてしまします。日本で承認されているのはレムデシビルだけです。アビガンは注目されていますが、その効果は分かりません。他はまだ治験の段階ですので、これを使ったら治療できるという薬はありません。では、インフルエンザではどうでしょうか。実は、インフルエンザもほぼ同じような状況です。インフルエンザにかかったほとんどの人は、自分の免疫の力で治っています。実際には、薬の力で良くなっているわけではありません。ですから、治療薬に関してはそれほど期待ができません。

ワクチンはまだできていません。いま、世界中が競って作っていますけれども、私個人的にはあと2年ぐらいいかかると思っています。要するに、皆さんがワクチンを接種できるようになるのは2年ぐらいい先になるということです。1年以内でワクチンが開発できれば、東京オリンピックを開催することができるとは思いますが、ワクチンができないと危ないですね。しかも、できたワクチンは十分な発症阻止効果があり、副作用がないこと、つまり安全性が担保されなければ承認

されません。現在、実は治験第3相とって、ある人達を二手に分けて、ワクチンが入っている注射を打つ群、もう一方には何も入っていない注射(偽薬)をする群に対して治験をしています。ここにとても時間がかかります。それで発症阻止できて、安全性が十分担保できるとワクチンになります。今のところ、エイズのワクチンですらできていませんし、インフルエンザワクチンは毎年できますけれども、効果は限定的です。また、先程もお話したとおり、抗体

咳やくしゃみをしたときにウイルス粒子の飛散

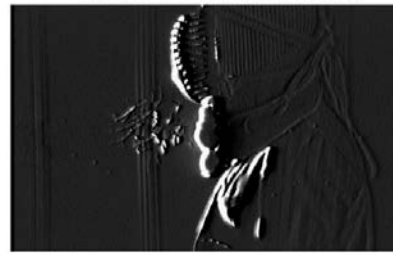


ができて、すぐ消える可能性がありますから、毎年接種しなければならないかもしれません。ここからは少し剣道のお話をしたいと思います。剣道では「マイクロ飛沫」に注目する必要があります。人がくしゃみをする、大きな飛沫が出ることは分かっていますが、それに加え、空気中に漂うマイクロ飛沫というものも出ます。大きな飛沫は床に落ちていきますが、マイクロ飛沫は空気中を漂っていますので、剣道では、面マスクをつける必要があるということです。飛沫の大きさを分けて考えると、大きな飛沫(100ミクロン前後)はソーシャルディスタンスを保っていれば大丈夫です。稽古のときに、お互いの間隔を2mとるということはこのようなことに基づいています。とこ

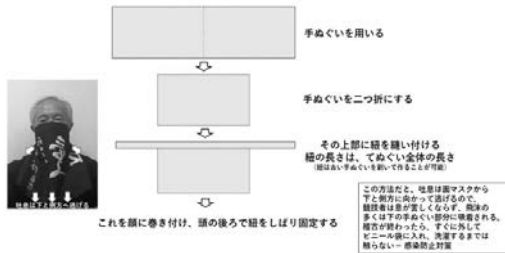
新日本空調での飛沫飛散の測定調査



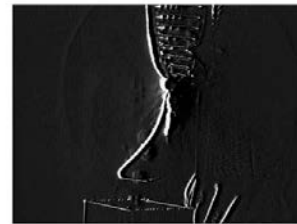
気合による飛沫の飛散



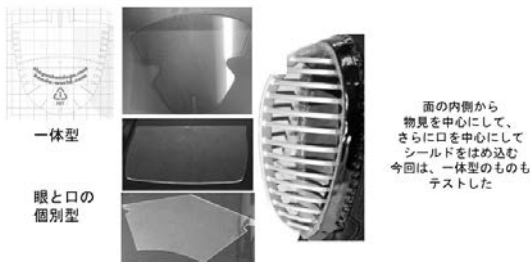
今回使用した「面マスク」の一例



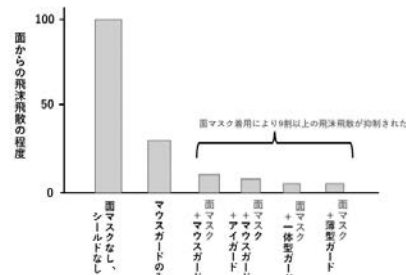
面に面マスクとシールドをしたとき
(飛沫飛散防止率が約95%!)



今回使用したシールドの一例



検査結果の概略



ろが、小さな粒子、サイズになると5ミクロン(1mmの1,000分の1)程度ですけれども、これが空气中に滞留して、これがエアロゾル感染の可能性につながります。先程のアメリカの合唱団でのクラスター感染もこれが原因とされています。

剣道では、これを何とかしなければなりません。面マスクやシールドを付けない状態で気合を出すと、大きな飛沫やマイクロ飛沫が飛ぶことが分かっています。

ですから、全日本剣道連盟は飛沫飛散の測定調査を行ったので、その結果をお話します。まず、何もつけずに直立し静止した状態で、口から気合(面、小手、胴)

を出したとき、「小手」と言ったときに最も飛沫が出るということが分かりました。

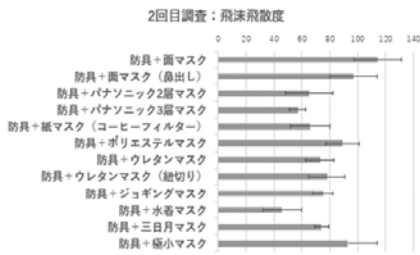
次に、何もしない場合、面マスクをする場合、フェイスシールドを使用した場合など、様々な条件で実験を行いました。その結果、面マスクをすると約9割の飛沫飛散を防止できることが分かりました。これに対してシールドで口だけを覆ったものは、7割程度しか飛沫飛散を防止できませんでした。しかし、あくまでもこちらのデータは、どれだけ自身の飛沫飛散を防止できるかといった観点からのデータということをご承知おきください。本来であれば、飛沫粒子中のウイルス粒子量

を見たいのですが、感染実験ができません。感染をどの程度ブロックするかということを見たいのですが、感染した人は亡くなってしまう可能性があるため、倫理的にはできません。

また、様々なマスクの種類を挙げて実験をしましたが、どれも大きな違いはありませんでした。そして、マスクをして鼻だけ出しても、飛沫飛散はあまり変わらないということが分かりました。今後開催される講習会や審査会では、面マスクを絶対につけるようにと指導をします。また、60歳以上の方にはシールドを付けることをお勧めしています。

剣道の飛沫飛散に関してもう

面マスクの違いによる飛沫飛散は少ない



一度ご説明をしますが、大きな飛沫は重力で下に落ちます。2m 離れば下に落ちますので、問題ありません。しかし、問題は細かい飛沫です。これは大気中に漂いますので、換気をしなければなりません。ですが、それもエアコンでは同じ空気を回しているだけですから、扇風機などを用いて外に空気を排出さなければなりません。あとは、道場に入る際に手指をアルコール消毒するという事です。

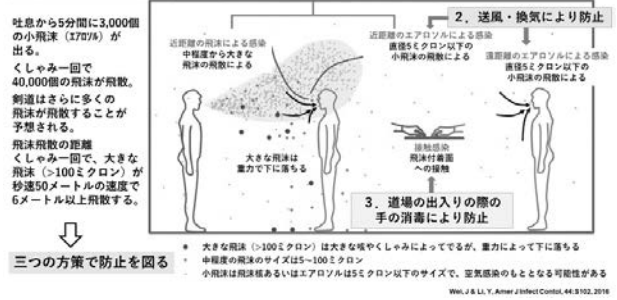
面マスクをしながら行う場合の注意点として、熱中症についても考えなくてはなりませんので、続いては熱中症のお話をします。昔は、症状から熱失神、熱けいれん、熱疲労、熱射病と分類されて

きましたが、最近ではI度、II度、III度というように軽症から重症度に分けられています。I度は、めまい、失神、筋肉痛、筋肉の硬直、II度は、頭痛、吐き気、嘔吐、倦怠感、虚脱感、III度になると、けいれん、意識障害、手足の運動障害、高体温になってしまうと死亡する可能性が高くなりますので、必ず救急車を呼ばなければなりません。

最近では地球温暖化の影響から暑くなってきていますので、熱中症患者は増えています。特に救急車で搬送される方も少なくはありません。

しかも、高齢者が多く、その数値が上がり出すのは60代からです。

剣道における新型コロナウイルス対策



さらに、小・中・高校の部活動中の熱中症ですが、室内競技では柔道に次いで2番目に剣道での熱中症が多いことが報告されています。これは向こう約40年間のデータですが、剣道では11名が亡くなっています。新聞沙汰や訴訟問題にもなりますので、これは避けなければなりません。

熱中症のメカニズムについてです。通常は汗をかいて、その気化熱で熱が逃げます。また、皮膚の血管が広がると、その熱伝導で熱を逃がせます。これらが上手くいくと、体温上昇が防止されます。しかし、これらのメカニズムがうまく機能せず、体温が上がってしまうと熱けいれん、熱疲労、熱失神で体温が上昇して、最終的には

剣道で起こる重大な事故：熱中症

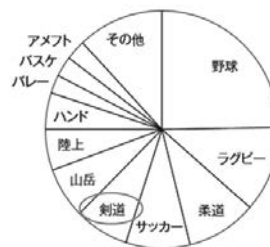
からだの中に熱がたまり、体温が上昇する状態

どのような人がなりやすいか(からだ・行動)

- ・脱水状態にある人
- ・高齢者、乳幼児
- ・からだに障害のある人
- ・肥満の人
- ・過度の衣服を着ている人
- ・普段から運動をしていない人
- ・暑さに慣れていない人
- ・病気の人、体調の悪い人

熱中症
環境保健
マニュアル
2018
出典

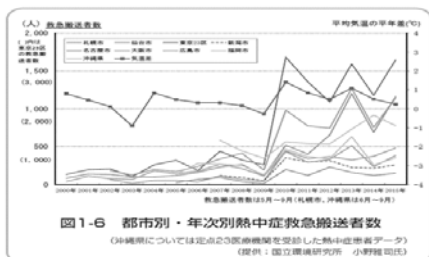
室内競技では柔道に次いで熱中症が多い！



スポーツ部活動の種目別 学校管理下の熱中症死亡事故 (1975~2017年 N=145)

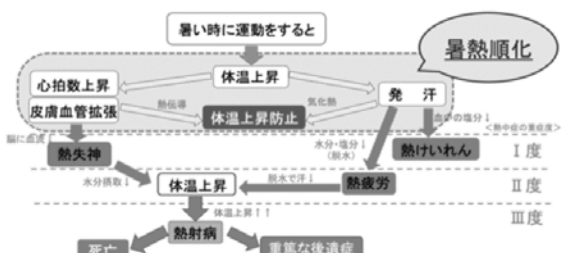
種目	野球	ラグビー	柔道	サッカー	剣道	山岳	陸上	ハンドバレー
件数	37	17	16	14	11	9	7	7
種目	バスケット	アメフト	卓球	レスリング	ソフトテニス	総計	その他	計
件数	4	4	3	3	2	2	2	4

熱中症患者の救急搬送は急増中

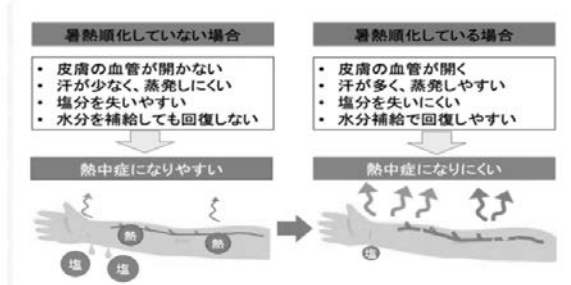


熱中症
環境保健
マニュアル
2018
出典

熱中症のメカニズム



暑熱順化（しょねつじゅんか）とは？



熱射病になってしまいます。

暑い中で運動をしていくと、体がこの過程に慣れていきます。これを、暑熱順化と言います。図の左側が暑熱順化をしていない場合で、皮膚の血管が開かない、汗が少なく蒸発しにくい、塩分を失いやすい、水分を補給しても回復しない、つまり熱中症になりやすいということです。しかし、暑い中でトレーニングをしていると、暑熱順化していきます。暑熱順化をすると、皮膚の血管が開きやすい、汗をかきやすく蒸発しやすい、塩分を失いにくい、水分補給で回復しやすい、つまり熱中症になりにくいということです。

では、暑熱順化をするには、どれくらいかかるかというと、皮膚の血流が増えやすくなる、汗をかきやすくなるというのは、自律神経系の働きですので2~3日は最低でもかかります。汗がサラサラになったり（蒸発しやすくなる）、汗の中の塩分が減るといのは内分泌系の作用ですので、最低でも4~5日かかります。なので、暑熱順化には最低でも1週間かかるとおっしゃってください。ですから、全剣連のガイドラインでも1~2週間は基本稽古をしてください、いきなり面を着けないでくださいということを言っていますが、

それはその間に暑熱順化して下さいということ。では、暑熱順化がなくなるのはどれくらい必要かというと、3日あればなくなります。したがって、週に1回稽古している人は、1週間後にはもとに戻っているということになります。少なくとも週に2回稽古を行わなければ、暑熱順化はしないということです。

熱中症を予防するためには、面マスクやシールドをつけないのではなく、稽古前に水分補給をすること、道場の風通しを良くすること。これは、クーラーだけではなく換気も必要です。特に、急に暑くなる日は要注意です。熱中症は、6月、7月が最も多いですが、今年は9月になっても異常に暑いので注意が必要です。そして、徐々に稽古量を増やして、暑熱順化をさせていくことが大切です。そして、大切なことは指導者が各自の体調に気を配ることです。睡眠不足や朝飯を食べていないとかの場合は熱中症になりやすいので、個々の体調に気をつけなければなりません。暑熱順化が進む前に稽古する場合には、早めに稽古の休憩を入れることで、面を外させる回数を多くしなければなりません。ですが、熱心な先生が初日から休みも取らず

「剣道における熱中症」報告システム 概要

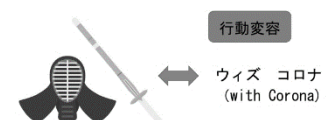


に1時間半、2時間の稽古をすると、熱中症が増えてしまいます。

現在は全日本剣道連盟で、Googleフォームを用いて「剣道における熱中症」報告システムを始めました。携帯電話を使って届け出を出せるようにしています。8月10日現在で、17件の報告がありました。軽症は2例、中等症が12件、III度の方が2名いますけれども、どれも救急車では運ばれていません。今はまだ熱中症が起りやすい時期ですので、気を付けなければなりません。

以上を踏まえると、暑い夏で、新型コロナウイルス感染症が収束していない中で、我々は行動変容をしなければなりません。行動変容としては、剣道では面マスクをする。高齢者では、できるだけシールドをして面マスクをすることが必要です。面マスクとシールドの違いですが、面マスクは大きな飛沫を防止して、万が一、小さな飛沫が飛んだとしても、シールドがそれを止めてくれます。またシールドをすることで、他人からの飛沫もかかりにくくなりま

剣道と新型コロナウイルス感染症との関係



す。つまり、うつりにくくなりますし、うつしにくくなるということです。行動変容として面マスクやシールドをすることは必要です。それと同時に、三密を避ける、換気をする、手を洗う、道場の床をきれいにする、剣道着を毎回洗う、剣道具はアルコール消毒をするなどの行動変容も必要です。

愛知県警の剣道特練員によるクラスター発生があり 20 数名の感染者が出たために、警察は 10 月末まで剣道ができなくなっているそうです。しかし、新型コロナウイルス感染症が収束しつつある中で各地の道場で剣道が再開されています。その中で、行動変容を伴うことで、剣道による感染クラスターを出さないようにしないといけないというのが、今日のメッセージです。感染状況が徐々に収束するとしても、第 3 波、第 4 波はありますから、With コロナを考えていかなければなりません。新型コロナウイルス感染症は身近にあるもので、それを行動変容によって守る。治療薬やワクチンに期待してもダメです。さらにいうと、新型コロナウイルスを避けるためと熱中症を避けるためには別々の方策が必要です。その両者をきちんとやってこそ、初めて剣道と新型コロナウイルス感染症との共存ができるというのが今日のメッセージです。ご清聴ありがとうございました。

3. 質疑応答

【廣野】宮坂先生、ありがとうございました。新型コロナウイルス

とはどのようなものかについてのご説明から、剣道における対策と対策によって起こりうる熱中症といった他の問題への対策など、大変分かりやすくご説明いただき、大変勉強になりました。それでは、これから質疑応答に移らせていただきます。はじめに、私から質問をさせていただきます。

今回、熱中症の対策によって起こり得る問題をお聞かせいただいたのですが、冬になると新型コロナウイルスだけでなく、様々な感染症が起こりやすいという印象があります。これからの時期に特に気をつけた方がよいこと、予見されることについて先生のお考えをお聞かせください。

【宮坂】インフルエンザ感染症については、明らかに季節性がありますので、ワクチンが絶対的に必要です。ですから、普段インフルエンザの予防接種を受けない方もいらっしゃると思いますが、今年に限っては予防接種を受けられた方がよいと思います。また、いつ受ければ良いかという、予防接種の効果は大体数カ月ぐら

できれば 10 月中に、遅くとも 11 月には受けられてください。そうすると、11 月、12 月、1 月、2 月、3 月とインフルエンザの流行期は乗り切れると思います。

もう一つ、お年寄りの感染症で怖いのは肺炎です。65 歳以上になると、肺炎球菌ワクチンを 5 年ごとに受けることができますので、きちんと受けていただくと思います。私も肺炎球菌ワクチンを受けましたが、地方自治体から 5 年ごとにお知らせがあります。肺炎球菌ワクチンについては非保険診療ですから、診療には数千円掛かってしまいます。しかし、肺炎になってしまうとお勧めに行けないということになりますので、給料も減る可能性があります。場合によっては、死ぬこともありますので、ワクチンをしていただいた方が賢明です。ですから、インフルエンザワクチンは毎年必ず接種してもらおう。そして、肺炎球菌ワクチンは 5 年に一度必ず受けるのがよいと思います。また、今年はできないと思いますが、新型コロナウイルスのワクチンができれば、またそれもやるとい



質疑応答の様子

うことが良いと思います。

インフルエンザ感染症に対しては、迅速診断キットというのが各開業医のところに置かれています。その診断キットと共に、新型コロナウイルス感染を迅速に診断できるものも現在、開発が進んでおり、おそらく11月ぐらいには完成するといわれています。それまではマスクをする、三密を避けるといった皆さんの行動変容で防御していただくことが重要になりますね。たとえば、今年インフルエンザに罹患する人が少ないですが、それは皆さんが三密を避けて、手を洗って、うがいをしているからだろうといわれています。感染症の対策としては、新型コロナウイルスもインフルエンザも共通している部分がありますから、個人が行動変容をして、できることはしっかりしていただくということが良いと思います。

【廣野】ありがとうございます。それでは、関西大学のアレクサンダー・ベネット先生よろしくお願ひいたします。

【ベネット】関西大学のベネットです。非常に興味深いお話、ありがとうございます。マスク着用に関する質問ですが、宮坂先生は熱中症の危険性について話をされましたが、HYPOXIA(低酸素)については何か注意することがありますでしょうか。

【宮坂】低酸素に対しては、残念ながらデータを持っていません。飛沫飛散の防止に関する実験は比較的簡単にできたのですが、運

動後の低酸素に関する実験は難しいです。運動時の血中酸素を測定するパルスオキシメーターを使ってデータを取るとするのは難しいので、現時点ではそのデータを持っていません。やることは必要だと考えていますが、残念ながらデータはない状況です。先週、私自身も稽古を試みましたが、面マスクとシールドをつけて稽古をすると明らかに息苦しいです。私は心臓にペースメーカーが入っていますが、心臓の状態というのは血液検査をすると分かりますが、面マスクとシールドをすると、明らかにデータは悪くなり、低酸素になっていると思います。だからこそ、稽古の時間を短くしてお休みを取りながらやらないと、乗り切れないと思っております。

【廣野】ありがとうございます。マスクの種類が運動時の心肺機能に与える影響について、全日本剣道連盟からも情報が発信されていたと思います。最近アメリカの研究チームから発表されたマスクの種類と発声時の飛沫の関係についての研究でも同様の結果が報告されており、なるほどと思っておりました。今、先生がおっしゃっていた呼吸のしやすさと飛沫の防止効果というのはトレードオフのような関係にあると考えてよろしいでしょうか。

【宮坂】たとえば、飛沫飛散を防ぐだけを考えれば、医療用のサージカルマスクやN95を使用すればよいのですが、あれを使うとそれこそ低酸素になって、苦しくて



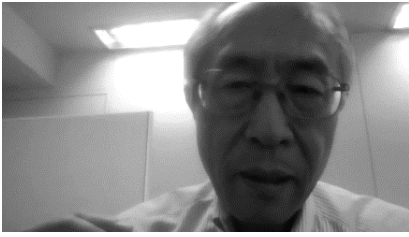
司会をする廣野氏

稽古をやっているどころではありません。医療用マスクをしながらランニングをして亡くなったという事例も報告されていますので、息のしやすさと飛沫飛散を防止しながら、なおかつ通気がある程度良いマスクを自分で探さなければなりません。全剣連でかなりの数のマスクを調べてみたのですけれども、全てを網羅できているわけではありません。ですが、ほとんどのマスクで飛沫飛散の防止ができていましたので、息の苦しくないものをご自分で選んでいただいで使用するということが大事だと思います。

【廣野】ありがとうございます。大変勉強になります。では、数馬先生お願いいたします。

【数馬】工学院大学の数馬と申します。今日は貴重なご講義をありがとうございました。道場の換気についてお伺いします。地下2階にあるスペースで自然風がない場所ですが、室内空調のほか、扇風機などにより廊下への排気などで対応しようと考えておりますが、その際注意する点があれば御指導をお願いいたします。

【宮坂】はい。地下ですと条件が限られてしまうので、換気をするとなると、入り口を開けて道場内の空気を外へ吹き出してあげなければならないですね。そのため



質問に回答する宮坂先生

には、扇風機を外に向ける必要があります。ただし、その方法ですと空調の効果が落ちますので、これもトレードオフの関係にありますね。空調だけですと、同じ空気を道場内で回しているだけですから、なんとかして小さな飛沫を外に出さなければならないので、できれば多少空調の効果が落ちたとしても、換気をしたほうが良いと思います。道場の窓が上に付いている場合は難しいですが、一般的には頭の高さに窓がありますので、そちらから外に空気を出していくということが大事になります。そして、空調を効かせながら、15分に一度換気をするということが必要になると思います。ですが、まだこちらはエビデンスがないので、今後検証していく必要があると思います。「このような方法だと感染しない」ということを積み重ねて証明していかなければならないですね。そして、剣道から決して感染クラスターを出してはいけない。そのために、「この間、新宿でも稽古の後に一杯飲みに行って感染してしまっ



質問をする数馬副会長

た」というような事態は絶対に避けなければならないことだと思います。

【数馬】分かりました。ありがとうございます。

【廣野】ありがとうございます。今、先生のお話の中でエビデンスのお話がありましたが、こちらは武道学会ということで、先生の方から武道学会に期待されることがありましたら、お話しいただければと思います。

【宮坂】面マスクにしてもシールドにしても、エビデンスが少ない状態ですが、とにかく剣道の稽古によって感染クラスターを出してはいけないと思います。もし出してしまったら、「剣道は何をやっているんだ」ということになってしまいます。柔道、空手、ボクシングでは出ないのに、剣道で出してしまうと剣道ができなくなってしまう。世界選手権もなくなってしまうかもしれませんが、とにかく剣道が安心して着実に積み重ねて再開できるようになるまでは、絶対に感染クラスターを出してはいけないというのが重要なことですね。もう一つは、成績に囚われ過ぎて生徒をしごとく、自粛明けですから怪我をしてしまうと思います。怪我をするかしないかというのも指導者の能力が問われますので、怪我人を出さないようにというのが2つ目です。

【廣野】ありがとうございます。対策によって、熱中症のお話もありましたが、これだけ長期間、運動の実施が難しいことはこれまでなかったと思いますので、怪我

にも注意しながら稽古や指導を進めていくのが大事なかなと思います。たとえば、飛沫飛散の実験をされたところで、実験の設定が難しいということはお伺いしたのですが、マスクを着用したときの「きつき」や「苦しき」に関するエビデンスというのは検討されているのでしょうか。

【宮坂】その辺に関してはエビデンスが不足している部分ですね。あくまでも安静時の飛沫飛散防止効果を見ただけですので、パルスオキシメーターも持っていませんでしたし。そもそも、稽古ができていけませんので、安静時に「小手」と発声して、面マスクとシールドがどれくらい飛沫飛散を防止できているかを見ただけです。たとえば、動的に切り返しをしたり、面打ちをしたりしたときに血中酸素濃度がどれくらい下がるかということは、今回は残念ながらみていません。今後の課題だと思っています。ですから、パルスオキシメーターをお持ちの方がいらっしゃれば、しっかりと測定していただいて、発表していただくと非常にありがたいと思います。

【廣野】ありがとうございます。続いて、中京大学の堀山先生お願いいたします。

【堀山】中京大学の堀山です。剣道の授業で使う防具は共通で使うことが多いのですが、防具は消毒を心がける一方で、袴などの使い回しで気をつけることは何でしょうか。

【宮坂】まだそれもエビデンスが



質問する齋藤氏

乏しいですが、接触感染には注意を払わなければいけませんので、一回一回面マスクは変えないといけませんし、面についても共用で使うのであれば中をアルコールスプレーで消毒しなければなりません。小手なんかは消毒しておかなければならないと思います。それ以外の消毒方法もあるのですが、アルコール消毒ですとスプレーでできますし、乾燥してしまうのでそれをある程度買っておけばその都度スプレーをかけて消毒するのが良いと思います。そうすれば、共用することはできるかと思えます。剣道着に関しては、毎回変えるか洗濯してもらうかはしていただく必要があると思います。面マスクも同じものは使ってはいけません。これらは本人の努力でできることだと思いますので、これは励行した方がよいと思います。

【廣野】ありがとうございます。専修大学の齋藤先生お願いします。

【齋藤】専修大学の齋藤です。うがいの効果について教えてくださいませんか。口腔内に入ったウイルスは、どれくらいの時間で体内に入ってしまうのでしょうか。マスクをしていて稽古をしても飛沫飛散はあるかと思いますが、面を外してすぐのうがい

の効果はいかがでしょうか。

【宮坂】うがいはインフルエンザの予防にも使われていますので、全く効果がないわけではないですが、うがいが届くところは喉だけということを理解しておかなければいけません。先ほどもお話ししたようにウイルスの受容体は肺にもありますし、空気の通り道である気道にもあります。そのため、うがいだけで完全にウイルスを防ぐことはできません。ですから、ウイルスが喉に付いた人はうがいによってその排出量を減らすことは可能であると思いますが、完全に取り除くことはできません。もちろん、ある一定量のウイルスが出てこない限りは感染しにくいと思います。そういう意味ではマスクをつけていた方がよい、剣道を行う場合は面マスクをつけておいた方がよいということです。うがいで完全に防げるかということ、そういうことではありません。

【齋藤】ありがとうございます。マスクをしていても、稽古の中で感染者がいた場合には、飛沫飛散があると思いますが、稽古が終わってすぐにうがいできればしたほうがよいと思うのですが、どの程度の効果があるのでしょうか。

【宮坂】面マスクとシールドをしっかりして、手・剣道具を消毒した方がよいと思います。うがいはできればやれば良いのですが、それで防げるというエビデンスは残念ながらないですね。ですから、やらないよりはやった方がよい

ということであって、うがいをしただけで防げるかといわれると、それは残念ながらできないと思います。

【齋藤】ありがとうございます。

【廣野】ありがとうございました。では、國學院大学の植原先生お願いします。

【植原】國學院大学の植原と申します。これまで断片的に得ていた情報が体系的に理解できました。ありがとうございます。正課の剣道授業でいかに感染リスク低減を図れるかに苦心しております。飛沫が床に付着する可能性を考慮した場合（道着を床でたたむなど）、床の清浄・消毒を励行せざるを得ないかと考えております。要否をいかがお考えかお聞かせいただけますでしょうか。

【宮坂】全日本剣道連盟でも東京都剣道連盟でもガイドラインに書いてありますが、次亜塩素酸を用いて稽古を始める前に消毒をするということが大切です。そして、稽古が終わった後にもう一度消毒をし、座礼はしなくてもよいということですね。座礼をすると、飛沫が飛び散った床に手をついてしまうので、それはしなくても良いと思います。立礼でもよいという形にすることはもちろんですが、これもどうすれば絶対に防げるかというエビデンスはない。ただし、大きい飛沫飛散が2m以



質問する植原氏

内で床に落ちることと、ウイルス粒子は落ちたらすぐ死ぬわけではないということは分かっています。たとえば、プラスチックの面には数十時間も残っているということは分かっていますので、そういう意味では最初と最後に消毒をするほうがよいと思います。

モップなどで床を掃除する場合には、モップを水で洗うときにバケツの水を変えることが必要ですね。いくら次亜塩素酸をかけて消毒したとしても、そこに部分的にウイルスは残っています。本来であれば、ウォッシュャブルの物を持って行った方が無難だと思いますが、絶対にダメかと言われるとそこまでのエビデンスはありません。ただ、理論的にはその方がよいだろうということです。

【植原】ありがとうございます。大学に掛け合せて予算をつけてもらいます。

【廣野】続きまして鳴門教育大学の木原先生、お願いいたします。

【木原】With コロナの考え方は理解できましたが、以前の生活に戻れるのにはどのくらいの年月がかかると思われますか。

【宮坂】それは全く分かりません。私は、少なくとも1年間はこの生活が続くだろうと考えています。場合によっては、2~3年と続いても不思議ではありません。ですから、行動変容を伴った剣道というのは、ずっと続けていかなければならないと思います。また、新型コロナウイルス感染症の患者数によっては面マスクを外せる

ときもあるでしょうし、シールドが外せることもあるかもしれません。今はその途中の段階ですので、今の段階で1年経ったら絶対に大丈夫なんて根拠は全くありません。現状、ワクチンもありませんし、治療薬もない状態ですし、どうやったら防げるかを全て分かっている状況ではないので、これが続くと考えるほうが理にかなっていると思います。

【廣野】ありがとうございます。色々な形を模索しながら、より良い形を探していくということですね。

【宮坂】そうですね。ですから、今ある生活を受け入れて、その中でベストなものはどれかということに常に考えなければなりません。ピンチをチャンスに変えること、つまり発想の転換をしないと。いつになったらこれまでのような生活に戻ることができるかと思っていると、永遠にできないなんて可能性もあります。分かっている人は誰もいないのですが、アメリカではそういうことを予測した人達がいて、その人達によると3~4年続くだろうという意見もありますね。

【廣野】なかなか難しい問題ですね。

【宮坂】もう少し言うと、我々かしたら初めてのウイルス、未知のウイルスですので、全ての証拠があがっているわけではありません。そのため、感染様式や増悪様式、治療などに関してもまだまだ分からないことが非常に多いです。それについては、たとえば、

他の感染症でも1982年にウイルスが見つかったエイズも、今は死ななくなりましたが、まだアフリカ近辺では非常に流行っています。そういう問題がありますので、我々個人はそれぞれの状況に合わせて生活を変えていかなければならない。何かに頼っていると、永遠にできない状態になってしまいかねませんので、今何ができるかということをご考えていかなければならない。何か頼っていると、永遠にできない状態になってしまいかねませんので、今何ができるかということをご考えていかなければならない。

【廣野】ありがとうございます。東京学芸大学の奥村先生、お願いいたします。

【奥村】身近に感染者が出ない状況で練習をしていると、慣れて油断する人がでて、感染リスクが高くなると予想します。定期的に注意を促すほか、何か良い方法がありますでしょうか。

【宮坂】今までのピークを見ても、第一のピークが減ったのは行動変容を伴っているときです。感染者が減り、人々の気持ちが少し緩んできたときに第二のピークが起きるということですね。ですから、我々は残念ながらこの状況に気を許して行動変容を少しでも崩してしまうと、流行が起きかねない。ということは、剣道ができなくなってしまう可能性もあるということです。やはり、ある程度この病気が十分に収まって、エビデンスが積み重なってくるまでは、とにかく行動変容を続けなければならないと思います。

【廣野】ありがとうございます。同じことの繰り返しだけだと、ど

うしても悪い意味での慣れになってしまうと思いますね。

【宮坂】自分は絶対にならないだろうっていう変な安心感がある人が多いんですね。ですが、それは間違いです。子どもでもなるし、大人でもなるし、高齢者ならもっとなりやすいし、誰にでもなり得ますので、誰がターゲットになってもおかしくないものです。ですから、気を緩めれば、剣道の感染クラスターが起り得ます。そして、それを起こしてしまった剣道連盟は世間から叩かれます。ですから、それを考えるとやはり安全にできるという方法を確立する方が先だと思います。今は始まったばかりですので、剣道に関しては無事に再開できて、本当にこれが継続・発展できるかということが分かりません。この時期にもう一度基本に立ち返って、筋力を強化するとか、剣道形をすとか別の方法があり得るということを考えてもらえればと思います。

【廣野】ありがとうございます。続きまして、筑波大学の香田先生お願いします。

【香田】先日の福岡の審査は無事に終えることができたのでしょうか。

【宮坂】先日、私の兄の昌之が福岡に行きまして六・七段の審査会の感染症対策の指導をしたようですが、無事に終了したとのことでした。少なくとも、あの規模の審査会だとガイドラインに則って注意をしながら実施すればできるであろうということが分か

りました。しかし、注意は継続していくことが必要であろうということ聞いております。

【廣野】ありがとうございます。このような事例を積み重ねていくことが大切ですね。つい先日、主催大会の実施ガイドラインも出ましたし、少しずつ事例を重ねていって、開催ができる行事が増えていくということでしょうか。

【宮坂】はい。このエビデンス作りは皆様がやらなければなりません。先ほどの道場の換気も、剣道具の使い回しの方法も個々によって条件が違うので、各条件を踏まえながら感染者を出さないためにはどうすればよいかということを考えていくことが大事ですね。来年の日本武道学会ではそういう発表も皆様からしていただければ、エビデンスが徐々に蓄積されていくのではないかと思います。特に現場からの声が非常に重要だと思います。

【廣野】私も自然科学的な研究を設定するにしても、今までと同じような実験設定はなかなか難しく、今の時代に即した方法に切り替えていくことも大事なことであったと思います。

【宮坂】今までの常識ではとても間に合わなくて、新しい状況を考えて、それが安全に実施するためには何が必要か、という新しいクエスチョンを考えないと、アンサーが出てきません。それを個人が宿題として持っているんだと考えています。

【廣野】ありがとうございます。東京学芸大学の奥村先生お願い

します。

【奥村】防具や竹刀の保管法で、ウイルスが生存しやすい・しにくい方法、ウイルスが完全に消滅するであろう期間はどの程度でしょうか。

【宮坂】それもエビデンスはありません。たとえば、一般のプラスチックだったら数十時間だというものはありますが、竹刀について行った実験は残念ながらありません。竹刀は風通しの良い所に置いておくことが必要です。防具はきちんと乾かさなければなりません。このような一般的なことは必要だと思いますが、そこまでガイドラインが必要かといわれるとそうではないと思います。それは、個々の条件が違いすぎますから、実際には、皆様の判断できちんとやっていただくということですね。

【廣野】ありがとうございます。たとえば、竹刀だと洗うことは難しいと思いますが、アルコールで拭いたりとかは必要でしょうか。

【宮坂】もちろんアルコールで拭くなどの対策は大事だと思います。しかし、そこまでしなきゃいけないかといわれると、そこまでのエビデンスはないですね。剣道具は除菌スプレーをする。剣道着や面マスクは毎回洗濯をする。竹刀に関してまで、どうこうするほどのエビデンスは今のところありません。

【廣野】では、今のところはいつも通り、なるべく風通しが良いところに竹刀を保管しておくことが良いということですね。



最後にお礼と拍手をする

長尾会長

【宮坂】竹刀を保管するわけですから、湿ったところに置けば痛みますし、カビも生えますよね。

【廣野】道具の保存方法と感染症対策の両面からそういったことを考えていくことが必要ですね。

【宮坂】最後に私から話題提供をさせていただきます。先ほども申し上げたとおり、今は新型コロナウイルスと熱中症について、個々に対策を立てる必要があるとお話をさせてもらいました。今は、全日本剣道連盟で重大事故報告システムもあります。たとえば、救急車で運ばれたような重大事故は届け出をしてくださいということをお願いしています。その中にアキレス腱断裂が入っています。アキレス腱断裂について、従来は、剣道歴が長く、アキレス腱が古いゴムのようになってし

まうと、負荷に耐えきれなくなり切れてしまうという事例が多くありました。準備運動を行ったからといって必ずしも大丈夫であるということではなく、稽古の途中で切れるということがあるわけです。しかし、最近報告をされているのは、休み明けの稽古で体が慣れないうちに指導者が長い時間稽古をさせて、疲れ果てて、初心者にも関わらず、稽古の後半で切れる。それは明らかに過度の負担がかかり過ぎてしまっています。だいたい16歳～18歳の女の子に特に多いです。本来は、張力がかかると伸びるはずなんですけれども、1時間半とか2時間半の時間を練習させ続けると、疲れてそのために過度の負担がかかって切れてしまうということがあります。この暑い時期で自粛明けということも重なっていますので、指導者が稽古法をしっかりと考えなければならぬと思います。個々の状況に合ったメニューを考えてあげなければいけません。ただ強くなりたいということやっ

都合が出る可能性があります。これについてはご注意ください。と思います。

【廣野】ありがとうございました。私自身もアキレス腱に関する研究をしているので、大変興味深く聞かせて頂きました。新型コロナウイルスに感染させないということだけを考えれば、何もしないということになりがちですけれども、今回出して頂いたガイドラインによると、剣道を行うという前提でできる限りの安全を確保しながら進めるという形について示していただき、非常にありがたいことです。また我々個人でも安全を留意しながらいろいろな検討をしていくことが大事ですね。

本日のお話を聞いて、大変多くのことを学ぶことができました。最後に繰り返しとなりますが、本日は大変お忙しい中、貴重なご講演をいただきまして、宮坂先生、本当にありがとうございました。

若手研究者の研究や博士の学位取得までの取り組みを紹介

最新若手研究の動向

近年、博士の学位を取得した、あるいは取得を目指す若手研究者が増えてきた。中には剣道の指導的立場に立ちながら、あるいは日本代表レベルの選手として活躍しながら、研究と現場とを両立させて学位取得を果たした研究者も現れている。そこで、2017年度から続く特別企画として、博士の学位取得をした研究者を招いて行われた「武道ワールド (<https://budo-world.taiiku.tsukuba.ac.jp/>)」(代表：酒井利信・筑波大学教授)の企画に参加し、学位取得までの経緯や取り組みについてインタビューを行った。

研究紹介・インタビュー

下川 美佳 氏 (鹿屋体育大学体育学部 講師)

学位論文

「大学剣道における女子競技者の踏み込み音が打突の評価に及ぼす影響」

2003年3月に鹿屋体育大学体育学部卒業、2005年3月に同大学大学院修士課程体育学研究科体育学専攻修了。同大学体育学部助手、助教を経て、現在は講師。同大学剣道部コーチ、女子監督を務める。

2019年に鹿屋体育大学大学院博士課程体育学研究科大学体育スポーツ高度化共同専攻を修了し、体育スポーツ学の博士号を取得する。剣道教士七段。世界剣道選手権大会出場3回・団体優勝2回・個人3位1回、全日本女子剣道選手権大会出場8回・ベスト8に3回、全国教職員剣道大会優勝2回・準優勝2回、全日本女子学生剣道優勝大会優勝3回・準優勝1回など、数々の輝かしい戦績がある。

〈学位論文概要〉

【目的】本論文では、剣道における踏み込み音が打突の評価に及ぼす影響について検討することを目的とした。

【研究1】研究課題1では、打突時の音に着目する重要性を示すため、打突に伴って生じる発声・打突音・踏み込み音を、大学剣道競技者が競技者および審判者の視点で「どのように捉えているか」について明らかにすることを目的とした。大学剣道競技者110名を対象に、打突に伴って発生する音の捉え方に関するアンケート調査を実施した。アンケートでは、動作と音の打突評価への貢献度、競技者・審判者それぞれの視点での打突音の聴音の程度等について、調査した。アンケートの回収率は99%であり、分析対象者は109名(男性：55名、女性：54名、年齢：19.7±2.2歳、学年：2.4±1.2年、段位：3.3±0.6段)であった。調査の結果、打突評価は動作と音の両方で判断しているが、音も重視している傾向があること、踏み込み動作が打突評価に良い影響を及ぼすと思うと考える回答が多いこと、競技時より審判時に打突音を聴音しているとの回答が多いことが明らかとなった。以上より、競技者と審判者のそれぞれの視点で、打突に伴って発生する音に着目する重要性と特に踏み込み音に関して検討する必要性が示唆された。

【研究2】研究課題2では、打突音と踏み込み音およびそれらの複合音の相違を明らかにすることを目的とし、小手打ち動作に伴って発生する打突音、踏み込み音、それらを複合した音の特性について検討した。大学女子剣道競技者6名を対象に、右小手打ちを3種類の試技にて実施した。3種類の試技は、1) 打突のみ、2) 踏み込みのみ、3) 打突+踏み込み(複合)とし、動作映像と発生音をビデオカメラと騒音計にてそれぞれ収集した。打突判断の反応時間に関する先行研究を参照に、最初に音が発生した0.5秒前から1.5秒間の範囲における、音の100Hz毎の振幅スペクトル量と音の強さについて解析し、3種類の試技間で比較・検討した。その結果、周波数帯の振幅スペクトル量は、打突のみ試技と踏み込みのみ試技および複合試技で発生する音で異なり、打突音は高い音、踏み込み音は低い音に特徴を有し、踏み込み音は低音域において複合音に対する貢献度が高いということが示唆された。さらに、音の強さについて、打突音は踏み込み音と複合音よりも弱いことが示唆された。以上より、人が聞き取りやすく大きな音がする踏み込み音は、有効

打突の判定に何らかの影響を与える可能性が考えられた。

【研究3】研究課題3では、踏み込み音の違いによる打突における冴えや強度の評価に及ぼす影響を探ることを目的とした。これらの課題を検討するため、映像資料を作成し、一対比較法による評価テストを実施した。映像資料は、大学女子剣道競技者1名が行う右小手打ちについて、動作・打突音・踏み込み音の資料を別に収集した。踏み込み動作は、1) 足裏全体試技、2) かかと接地試技、3) つま先接地試技の3種類を実施し、収集後の編集により4) 足裏全体試技の音量を200%にしたもの(足裏全体200%)、5) 踏み込み音なしの全5種類を作成した。以上のうち、すべての資料で動作と打突音は同じとし、踏み込み音のみを変化させた5条件の映像資料を作成した。作成した条件のうち、踏み込み動作1~3は踏み込み方法の異なる「踏み込み方グループ」、踏み込み動作1および4、5は音の強さの異なる「音量グループ」とし、それぞれのグループで一対比較法による評価テストを実施した。評価テストの対象者は、剣道の審判経験を有する剣道競技者21名(男性:13名、女性:8名、年齢:42.6±6.1歳、段位:6.6±0.4段)とした。対象者は、各グループのうち異なる2条件の映像資料を視聴し、打突の冴えまたは強度の観点から、前者と後者のどちらが良かったか、または変わらなかったかについて回答した。得られた回答から、映像条件毎の各対象者の選択数、映像条件毎の平均選択数、映像条件毎の冴えや評価に対する評価の嗜好傾向について、分析を行った。その結果、踏み込み方グループにおいて、足裏全体条件は、かかと接地・つま先接地条件よりも冴えと強度の両方で有意に平均選択数が多く、足裏全体で行う打突が良いと評価された。また、評価の嗜好傾向についても、足裏全体で行う打突が好まれ、特に冴えの評価に影響を及ぼすことが示唆された。音量グループにおいて、平均選択数は、踏み込み音なし条件で足裏全体条件および足裏全体200%条件よりも有意に少なく、足裏全体200%条件は足裏全体条件よりも有意に多かった。また、評価の嗜好傾向についても、足裏全体200%条件が好まれ、特に強度の評価に影響を及ぼすことが示唆された。以上より、踏み込み音は打突の冴えや強度の評価に影響を及ぼすことが推察された。

【結論】これらの研究結果から、打突音と踏み込み音が複合した音は、踏み込み音の影響を受けており、踏み込み音は打突の冴えや強度の評価に影響を及ぼすこと、さらに踏み込み方は打突の冴えに、音の大きさは打突の強度の評価に影響を及ぼす可能性があるとの知見を得た。大学生の剣道実践者は有効打突の取得、すなわち競技力の向上のために踏み込み音に着目した取り組みが有益であり、審判者として有効打突を判定する際には、打突を確実に眼で見定める能力と、打突音と踏み込み音を聞き分ける能力がいずれも必要であると考えられた。

【奥村】下川先生、どうもありがとうございました。それでは、質疑応答へ移りたいと思います。質問がある方は画面上で挙手をお願いいたします。では、酒井先生お願いします。

【酒井】下川先生、どうもありがとうございました。面白かったです。非常に面白かったです。まずは、この研究デザインに取り掛かったきっかけを知りたいです。足の踏み込み音に注目したきっかけというのはどういうところにあったのでしょうか。

【下川】はい、ありがとうございます

ます。踏み込み音に注目したきっかけは二つあります。

私は高校生の時、踵が痛く、踵サポーターを装着しないと剣道ができませんでした。大学に入学して、先生から「踏み込み方が悪いから踵サポーターが必要だ」との指導を頂き、踏み込み方を変えようと思いました。私はもともと踵から着くような踏み込みでしたが、それを足裏全体で踏むよう

にしたことで、「あ、なにか音が違うな」と感じました。これが最初のきっかけです。ただ、この時は打突評価と関連付けることなく「踏み込みの音が変わったな」だけ思いながら過ごしました…。しかし、試合を重ねるうちに、

下川氏はZoom ミーティングで参加・発表した



質問する酒井氏

先ほどの発表でお話ししたような、「あれ？当たっていないのに一本になった」という経験や一流選手の試合観戦、あるいは当時の鹿屋体育大学の女子剣道部監督であった有島先生の踏み込み音を聞くことで、踏み込み音は小手の打突音に近いのではないかと考えるようになりました。そこで、踏み込み音を良くすることが出来れば、打突の評価が上がるのではないかとの考えに至りました。

【酒井】競技実践の現場の中で感じられたことや経験されたことを研究テーマとして取り上げ、解明していかれたということですね。武道学研究の模範のような研究ですね。本当にそう思ってるんですよ。やっぱり、この踏み込み音とかっていうのは、剣道をやっていない人は、絶対にここには注目しませんから。ご自身の経験の中から出てきたことを解決されたんだなということで、非常に素晴らしいなと思いました。

【下川】ありがとうございます。

【奥村】ありがとうございます。その他、ございませんでしょうか。はい、植原先生お願いします。

【植原】本当に勉強させて頂きました。発表の中に示されてい

たのかもしれないですが、お伺いしたいのは、実験3の際に同じ小手打ちの場面の映像で、同じ映像でありながら音の種類を打突音と踏み込み音と複合音に変えたもので評価が変動しているという方法でのデータのとり方であっていますでしょうか。実際の映像サンプルを見させてもらった時には、実際に打突している映像と打っていない映像が出されていたと思うので、同じ打突でありながら音が違うと評価が違うという認識で良いのかということを確認させていただきます。

【下川】はい。発表では、小手を打っている映像と打っていない踏み込みだけの映像をご覧いただきました。これは、素材となる音を収集した時の映像であり、調査に使用した映像とは異なります。素材となる音と映像を編集し、調査は打突も踏み込みもある映像の中に、音だけ、打突音だけとか、踏み込みが違う音などを含む映像を使用しました。黒い画面で「ピー」という音が鳴っている映像のことです。

【植原】なるほど。はい、分かりました。

【奥村】では、私からよろしいですかね。踏み込みをする際に、踵とかつま先とかというのは、あまり良くないというお話で、足裏が良いというお話だったんですが、そういうことを聞くとやはりパフォーマンスだとか指導に生かしたくなってくる

んですが、良い悪い打突複合音を出すための踏み込み方のコツだとか、教え方のコツとかを教えて頂ければありがたいと思います。

【下川】はい、ありがとうございます。良い打突複合音といえば、全体の音を含んだ音で、打ち方とか、声の出し方なども含まれます。これについては、検討していないため、本研究の結果から明確にお答えすることはできません。

しかし、足の動きだけに特化して言えば、その違いは足が床に接地する面積にあり、床に接地する範囲を広くするような指導が有効と考えています。例えば、踵踏み込みやつま先踏み込みが良くないと説明をしましたが、どちらも足の一点が床に着く形になります。一方、足裏全体で踏み込んだ場合、接地する足裏の幅が広がります。このような踏み込みの仕方が、音を良くするとの言い方が正しいかは分かりませんが、良い音が発生しやすい踏み込み方になると考えています。

指導の方法につきましては、私自身が踵踏み込みだったものを、足裏全体の踏み込みに変えることで、踵の痛みがなくなり、音も良くなったとの経験を



回答する下川氏



質問する植原氏

事例として報告したことがあります。その事例に示した内容は、右足の指を丸めて、床に着く瞬間に指を開くという踏み込み方です。私の経験上の話で大変申し訳ないのですが…、このような指導方法が良いと考えています。

【奥村】もう少し発展した感じで質問をしたいんですけども、今の話を聞いていると、踵が痛い人は結構多いと思うんですよ。なので、いま実際に踵を痛めている人が、踵踏み込みになっているとかっていう実証や調査だとか、かつ、それで痛くなっている人がこの知見を活かして、こういう踏み込み方をすると痛みが緩和していくというのは、今後検討される予定はありますか。

【下川】はい、現時点ではそこまで発展させることができおりません。私自身が被験者になり、これまで実際に行っていた動きを実験器具の上、フォースプレートの上で行う調査は実施しています。しかし、普遍的な結論とするには、被験者が私一人で、昔のことを思い出しながら動いている点がネックと考えます。したがって、今後は、今まさに踵が痛い被験者に協力を願ひ、フォースプレートを踏ん

でもらったり、その動作の分析をしたいと考えています。そして、私が改善した事例を踏まえた指導方法を用いて、踵痛が治ったとか、動きが改善したとか、などの研究を行いたいと思っております。

【奥村】そうですね。かなり喜ぶ人が多いんじゃないかなと思います。ぜひ、やって頂きたいなと思いますね

【下川】ありがとうございます。

【奥村】では、植原先生お願いします。

【植原】私の考えといたらあれですけども、別に下川先生に批判的だというんじゃないで聞いて頂きたい。有効打突を判断する際に、音を重視するということには、私個人としては批判的な立場をとるものなんですけれども、ただ、現実問題として下川先生の研究を見ると、これもちょっと変な言い方になりますが、審判の有効打突の判定で、実際に音で判定が誤誘導される。まあもっと悪い言い方をすると、「ごまかされる」ということは、現実にあるのだということをお示しになっているという気はするんですね。現実そうなんだから、なんだかんだと抽象的な理想論を言ったところで、「現実是这样じゃないか」と提示されているという意味では、経験則だけでもものを言う人たちに対しての示唆になると私は思います。

一方で、先生が取られた直接のデータとの関わりはないのかもしれないのですが、一般的によく言われるのは、打突に至るまでのプロセスを評価するというのが剣道や柔道でも言われていると思います。その打突音を特に重視するべきというお立場をとるのか、その打突の有効性というものを判断するにあたっては、総論として下川先生ご自身はどのようにお考えになられているかということも伺っておきたいなと思います。今日のお話の冒頭で下川先生ご自身が体験された映像を見て、確かに小手には当たっていなかったんだけど、相手の手元を浮かせるというプロセスでは、下川先生の素晴らしさというのが表れていたんじゃないかと。実際に当たっていないからという意味では誤審ということになるんでしょうけれども、その状況に至らせたプロセスというのは下川先生の技の素晴らしさという部分もあるんじゃないかなと、思った次第です。ご見解を伺えればと思います。

【下川】はい、ありがとうございます。プロセスに関しては、先生がおっしゃっている通り、私も大事だと思っております。ただ、判定する基準に打突部位



司会をする奥村氏

というものが含まれている以上、当たっていないものを有効打突にするということがないようにしていただきたいとも思っています。そのため、目で見るのが一番であり、音はその参考と捉えていただきたいです。

また、冒頭の映像のように、小手と踏み込みの音は同じように聞こえますが、本来はそれぞれ違う音がしています。本研究は、それらを区別して聞くようなトレーニングをするべきとの提案でもあります。

加えて、私はこれまで競技者として試合に出ていた期間が長かったです。ゆえに、踏み込みは評価の一部であり、競技者はその踏み込み自体にもっと注意すべき、気を付けて直すべき点があると思っています。

踏み込み動作を見直す一つのきっかけとして、これを読まれた方が、何かしらを感じ取っていただければ良いとの思いで研究を進めました。

【植原】なるほど。分かりました。

【奥村】ありがとうございます。他にございませんか。有田先生、どうぞ、お願いします。

【有田】下川先生、ありがとうございました。やっぱり、視点が非常に面白いなと思いまし



質問をする有田氏

た。それをこういう一つの形にまとめられて、立派だなと思いました。ありがとうございます。確認ですが、植原先生も言っておられたんですけども、足裏全体で踏む音と、つま先から行く、踵から行く、三つの踏み込みの音があったと思いますが、音量に注目すると、大きさとしては足裏全体で踏んだほうが、大きくなるのは分かりません。で、その音の質的な問題として、結局つま先や踵から着くと、踵のほうがつま先から行くより大きな音にはなると思うんですけど、足裏全体で踏み込んだでも、「ドーン」と踏み込む人もいれば、「バチ」あるいは「ベチャ」という音などいろいろな音の質もあると思うんですね。

今回、踏み込み方が三種類あって、足裏全体ということで一括りになっていますけれども、実験の中では音量を揃えてやったのかどうかですね。そもそも音量自体が足裏全体のほうが大きかったんじゃないかなと想像するんですが、それは音域、低音域などいろいろあったんでしょうけど、音の大きさそのものが、その時点で違ったのかどうかっていうのが質問です。

【下川】はい、ありがとうございます。まずは、実験時に収集した踏み込みの音量ですが、先生のおっしゃる通り、足裏全体が一番大きい音でした。それに次いで踵踏み込み、つま先踏み込みの順番でした。質については、足裏全体踏

み込みがその他の踏み込み方より高音域でやや大きい量を示しました。また踵踏み込みとつま先踏み込みの波形は低音域での上がり方が大きく、高音域ではグラフの底辺を這うような形でした。したがって、踏み込みの音のみで比較するならば、足裏全体踏み込みでは高い音が強調され、つま先や踵踏み込みでは低い音が強調される特徴を持つと考えます。

【有田】その音量そのものは、調整はしていないんですね。結局、足裏全体で踏み込んだ方が大きな音が出ると実際は鳴っていたと、思っているんですけど。

【下川】素材を200%増加させたもの以外は、すべてそのままの音の大きさを使用し実験を行いました。

【有田】あともう一点、足裏全体で踏み込んだ時の音として、「バチ」とか、「ベチャ」とかどういふ足の音が良いのか、理想と言えるのか、どうお考えか教えてください。

【下川】私は「パン！」という音、弾けるような音が理想だと思っています。

【有田】ありがとうございます。

【奥村】ありがとうございます。齋藤先生、お願いします。

【齋藤】下川先生、ありがとうございました。勉強になりました。踏み込みっていうのは、体の力だとは思いますが、その意味では、音によって打突力自体の評価良くなると思いますが、実際に踏み込みの音が良い状態に入った時は、打突力自体も上がっている



質問をする齋藤氏

と思います。つまり、その音だけの増幅効果ではなくて、やっぱり良い踏み込みというのが打突力全体を上げているようなところは、さっきの下川先生のビデオを見ていたときに、あの打突力で打たれたらそりゃ小手も上がるだろうと思いました。その辺はいかがでしょうか。

【下川】はい。ありがとうございます。打突力については、今回測定等しておらず、なんとも言えませんが、打った感覚で答えさせていただきます。私の踏み込みは、良かったり悪かったりしますが、良かったときはやはり心地良い音で、心地良い手の感触があります。その心地良いが打突力に直結するかは分かりません。ただ、踏み込みが良いと手の感触も良いし、体の出も良いとの感覚は持っています。

また、まったく違う視点で申し訳ないのですが、踏み込み力について、フォースプレートで足裏全体踏み込みと踵踏み込みの圧を測りました。その結果では踵踏み込みの方が圧は大きかったです。そして、足裏全体踏み込みでは、圧が小さく音が大きい、との結果を得ました。実験器具を用いて測定を行えば、踏み込み動作によって、打突力が上がるや、手の感触あるいは音も良くなるなどの新

たな結果が得られるかもしれません。

【齋藤】フォースプレートに出る力積だとか、ピークフォースも影響すると思うんですけども、おっしゃる通りだと思います。今後もしそういう研究を進めてください。お疲れ様でした。ありがとうございました。

【下川】ありがとうございました。

【奥村】ありがとうございます。では、数馬先生お願いします。

【数馬】数馬です。大変勉強になりました。ありがとうございました。下川先生の強い踏み込みを一度拝見したことがあって、素晴らしいなと思って、聞いていました。先ほど、お話にあった指導の立場に立ったときに、そういう強い踏み込みをするためにはどうするのかという、具体的な教え方としては、今は右足が踏み込み足ですけども、中段であれば左足の状態っていうのが、どのように影響をしているか。左足や歩幅とか、左足の重心や蹴る力、足の力などがどのように右足の踏み込みに影響を及ぼしたのか。そういうことも今後、研究されるんじゃないかなと思うんですけども、そういうことにすごく興味を持っていました。それと合わせて、門外漢で申し訳ないんですけども、踏み込みというものが有効打突に影響を与える、あるいは、冴えに影響を与えるということで、私の大学に入ってくる大学生はこの10年位前から発声が後からついてくるということが多いです。植原先生がおっしゃった審判の

誤誘導に関わって、そういうことになっているのか、どうなのかについても興味がありました。二つだけ先生のご意見をお伺いできればと思ひまして、一つ目は、剣道を長くやっていると多くのお年寄りはずいぶん踏み込みが弱くなりますよね。足の力が弱くなったときに、どうしたらいいのかという展望について、先生ご自身の経験を通して、お考えがあればお話し頂きたいなと思います。二つ目のことは、大学生に多い、打突に遅れて発声することについてです。こちらについても、先生のお考えをお聞かせください。

【下川】はい、ありがとうございます。今回の研究では、左足の状態についての実験をしていないため、私の感覚を元にお話します。左足で上方向、斜め上方向に蹴り上げるのではなく、前に左足で押し出すイメージで行くと重心が高く上がらないと私は考えています。右足の太ももを踏み出すときに、高く上げずに重心を低くしたまま前に行くようなイメージです。左足の動きとしては、右足を踏み出させる蹴り方、体を押し出す蹴り方が良いと考えています。

発声については、私も打突後に発声する学生のことが気になり指導をしています。これまでの発声を含めた音の調査では、三つ



質問をする数馬副会長

(発声・打突音・踏み込み音)の総合的な音で評価が高まるとされています。したがって、学生さんの打突、踏み込み、発声がずれているのであれば、この先行研究に示されるような音が発生していても有効打突にならない可能性があると考えます。

また、私は、研究を進めるにあたり、この打突時の複合音(三つの音が重なったもの)が打突の評価に影響するとの知見を参考にして、実際には発声を省いた音を対象としました。ゆえに、先生がおっしゃる発声のずれた踏み込みと打突音については新たな課題と考えます。打突時に生じる音に関する新たな視点として今後調査を行うことで、有効打突にならないなどとの結果を得られるかもしれない、と先生のお話を伺い思いました。

【数馬】ありがとうございました。

【酒井】奥村先生、そろそろ時間のこともありますので、最後、私

のほうから質問させていただいて良いですか。下川先生、どうもありがとうございました。ちょうど3年前なんですけど、2017年の7月に先生の同僚でいらっしゃる竹中先生にも同じように博士論文に関する内容を発表して頂きまして、そのときも打突と踏み込みの時間差について発表していただきました。これも踏み込みなんですよね。鹿屋の先生は、踏み込みをずいぶん重視されているなという感じで聞かせて頂きました。竹中先生にお話しして頂いたときには、現場と研究の両立にすごく苦勞されて、それを克服されていたというお話も聞かせて頂きました。下川先生は、これを作り遂げるに当たって、ここは辛かったな、これはこうやって乗り切れたなというようなお話とかですね、それから、なんと申しますか自信のある顔をされていますけど、博士を取られて今どういったお気持ちかというのを最

後にお聞かせいただければと思います。

【下川】はい、ありがとうございます。両立という点ですが、同領域の先生方にご理解があり、日中は研究に専念させて頂きました。助教との立場もありますけど、他の先生に比べれば授業は少なく、日中に研究活動をして、午後夕方には、通常どおり博士課程に行く前と変わらず監督も稽古もさせて頂きました。そういう意味では、この時期が一番、研究と実技を両立できていたと思います。これまでも、当然、両立する機会はありませんでした。しかし、なかなか研究に踏み出す勇氣と言いますか、私には自信がありませんでした。今、自信のある顔をしているかも分かりませんが、これを機に研究にも力を入れて、今後も両立できるように頑張りたいと思います。

海外で活躍する指導者が剣道の普及や指導などの実情を紹介

剣道の海外事情最前線

1970年に第1回大会があった世界剣道選手権は現在までに17回開催され、参加する国と地域は17から56へと増加している。また、現在59の国と地域が国際剣道連盟に加盟しており、世界中に剣道愛好家がいることがわかる。剣道が本格的に世界に広まり始めてから50年以上の年月が経過し、この過程で世界全般あるいは各国・地域での剣道を取り巻く環境は大きく変動してきたと考えられる。一方で、世界には196もの国があり、剣道はいまだ普及の発展途上段階であるともいえる。そこで、本企画では海外で活躍する指導者を招いて実施された「武道ワールド (<https://budo-world.taiiku.tsukuba.ac.jp/>)」(代表:酒井利信・筑波大学教授)の企画に参加し、剣道の普及や指導などの実情を聞き、世界における剣道の在り方や普及などについて皆様と一緒に学び、考えていきたい。

インタビュー

阿部 哲史 氏 (国際武道大学体育学部 特任准教授)

1964年生、国際武道大学卒業、筑波大学大学院修了後、1992年に青年海外協力隊の剣道隊員としてハンガリー剣道連盟に派遣される。1995年より国立ベスプレム大学、タンカプヤ仏教単科大学を経て、2018年より国際武道大学体育学部武道学科所属の特任准教授となる。現在、ハンガリー国立体育大学に出向中。

【酒井】武道ワールドの特別講演ですが、本日は「剣道の海外事情最前線」ということで、今回はハンガリーで活躍中の阿部哲史先生をお願いをしまして、対話形式で講演を行っていきます。阿部先生よろしくお祈いします。

【阿部】よろしくお祈いします。
【酒井】阿部先生を簡単にご紹介させていただきます。1964年生まれで、私と同期になります。国際武道大学を卒業後、筑波大学大学院に進学し、武道論を勉強されて修了されております。その後、1992年に青年海外協力隊としてハンガリーに派遣をされております。2年半の任期を終えて、1回帰国されていますが、すぐにハンガリーのベスプレム大学に奉職され、現在に至っています。なので、先生がハンガリーに最初に行かれてから28~29年の月日が流

れており、現在は、ハンガリー剣道連盟の技術局長、ナショナルチームの監督、国際武道大学の特任准教授としての顔を持ちつつ、ハンガリーの国立体育大学で教鞭を執っておられます。以上が阿部先生の簡単なお紹介です。

また、ハンガリーという国についても簡単にご紹介させていただくと、東欧、中央ヨーロッパにあたります。31年前の1989年に体制転換がありましたが、その前は社会主義圏で、いわゆる冷戦時代の「鉄のカーテン」の向こう側でしたが、体制転換をして民主制の共和国になり、現在に至っています。首都はブダペストで、町自体が世界遺産で、非常に綺麗な街並みが残っています。阿部先生はこのブダペストを中心にご活動をされています。

それでは、阿部先生、まずはハ

ンガリーに行った経緯を教えてください。

【阿部】ただいまご紹介いただいた阿部哲史と申します。今日、このような場所にお招きいただき、大変恐縮しております。どのようなお話ができるか、自分でも整理がついていないのですが、本日は、酒井先生の質問に答えるという形で進めさせていただきます。どうぞ、よろしくお願い申し上げます。

まず、私がハンガリーに行った経緯ですが、簡単に言いますと、



インタビューを受ける阿部氏。

ブダペストからZoomミーティングで参加した



司会をする酒井氏

1991年に筑波大学大学院を修了し、つくばに1年間残っていた時に、ハンガリーのブダペスト大学から、山地征典先生が筑波大学に武道の研究をするためにいらっしやっていました。当時、山地先生は、剣道研と武道論にまたがって1年間研究活動をされていて、その時に誘われたということがそもそもの始まりです。ただ、当時出来上がったばかりの青年海外協力隊の中に剣道の職種はありませんでした。そもそも、青年海外協力隊は途上国を中心とした、草の根的な活動をしている組織ですから、ヨーロッパの派遣自体ありませんでした。特に、スポーツの種目の中でも柔道や空手、その他一般的な用具を使わないスポーツを途上国へ紹介していくということをしていましたものから、剣道は畑が違う。まさか、剣道がその種目に入る予定ではなかったという状況でした。そこで、山地先生が日本の外務省に働き掛けをして、ちょうどその2年半前くらいに鉄のカーテンが開



1992年 当時の国会議事堂

かれ、社会主義から民主化し始めたときでした。ですから、日本政府から梃子入れをしてもいいのでは、ということで、急遽、派遣が決まりまして、その第一号としてハンガリーへ行きました。名目としては、ハンガリー剣道連盟がハンガリーの文部科学省経由で申請を出して、私がそれに応募するという形で、ハンガリーの剣道連盟の専属コーチとして2年間の期限で呼ばれました。

【酒井】そもそも、ハンガリー剣道の始まりというのは、山地先生ですよね。その背景は、何かお聞きになっていますか。

【阿部】はい、そうです。ハンガリー自体で剣道が始まったのは1982年ですね。始めた方は、空手の関係者のようで、全くノウハウを知らなかったようです。現在、その方は80歳を過ぎておられます。その方が当時、「剣道をやってみたい」ということで、調べたところ、「地方の大学で教鞭を執っておられる山地という日本人の教授が剣道をやっていたらしい」ということを聞いて山地先生に頼み、手ほどきを受けたそうです。山地先生自体は、高校から剣道を始め、大阪外国語大学で高等師範OBの小森園正雄先生に指導を受けられていたそうです。山地先生は剣道三段を持っており、1971年に日本からハンガリーに渡られたそうです。ハンガリーが剣道を始めたとなったときに中心におられたそうです。ちなみに、ハンガリーの剣道連盟ができたのは1985年です。

【酒井】山地先生は剣道具を持っていたのでしょうか。

【阿部】詳しいことは確認しないと分からないですね。

【酒井】青年海外協力隊で剣道の派遣というのは阿部先生が初ですよね。

【阿部】青年海外協力隊での派遣というのは初ですね。

【酒井】その背景には、山地先生がいろいろ動いてくださってということですね。では、ハンガリーでの剣道の指導歴についてお話を聞かせてください。最初に青年海外協力隊でハンガリーに行ったときは、とても苦勞されたということをお聞きしていますが、お話をお聞かせください。

【阿部】その手の話ならいくらでもありますね(笑)。今、思い返せば半分笑い話のような話が多いです。そもそも、ハンガリーの剣道連盟自体が私をどのように受け入れたらいいのか、それからどのように具体的な目標を立てていかなければならないのか、という話もありますね。あまり悪いことは言いたくありませんが、それ以前に、協力隊自体も剣道の扱いを全く知らない状態だったので、一体世界中で剣道がどれくらい行われていて、東ヨーロッパがどの程度のレベルで、ハンガリー



1993年 山地先生と

が具体的に何をしたいかということは何も把握しない状況でした。見切り発進で手を付けたものですから、そこで送られた私もハンガリーが東ヨーロッパのどこにあるかも分からない状態でした。その状態で出発しましたので、すべて手探りでした。それから、青年海外協力隊によると「ハンガリーで剣道をしている人は150名程度いて、私はブダペストにあるクラブ3つを教えてまわる」と聞いていて計画を立てていました。しかし、実際に現地へ行ってみると、剣道をされている方は50名程度で、クラブも1つしかなかったというような状況でした。一番困ったのは、住居がなかったことです。青年海外協力隊の基本的なシステムとして、受け入れ先のハンガリー剣道連盟が住居を確保する仕組みのはずでしたが、それが伝わっていたのか伝わっていなかったのか分かりませんが、行ってみたら住むところもなく、半年くらいは家がないまま生活していました。

【酒井】聞くとところによると、青年海外協力隊からは帰ってもいいよというお話もあったようです。

【阿部】最初の半年が経ったくらいで、ハンガリー剣道連盟からは住居の話も聞いてないとのことでした。おそらく、金がなくて住居が用意できなかったんでしょう(笑)。あまりにも聞いていた話と違うので、協力隊の方も「帰りたければ引き上げてもいいぞ」といわれました。7月に派遣され、

12月の時点で告げられました。僕も実際、帰ってもいいかなと思った時期もありましたが、現地に留まりました。

【酒井】1992年、最初にハンガリーに行かれた時の向こうの剣道の状況はどうでしたか。特に、竹刀や剣道具などの道具はどうでしたか。

【阿部】基本的に剣道具は少しありました。おそらく、60~70人いたと思いますが、一応、全員に行き渡るぐらいの剣道具はありました。ですが、100%近くが全日本剣道連盟から寄贈される中古の剣道具です。中古品なのであまり良いものではありませんが、個数的に個人所有はできませんので、使いまわしながら使っていました。ハンガリーが最初で、ポーランドもそうですが、東ヨーロッパは全剣連に寄贈してもらった剣道具があったので、剣道を続けることができていました。もし当時、寄贈のシステムがなければ、剣道は今の状態のように世界には普及していなかったと思います。

【酒井】そうですね。先程のお話の中で、帰ってもいいかなと思った時期もあったとおっしゃっていましたが、最終的にハンガリーに残ろうと思ったきっかけにはどのようなことがあったのでしょうか。

【阿部】はい。それはもう剣道を習いに来ている愛好者の方の真面目さに心を打たれたからです。普通だったら、サッカーやハンドボールや水泳をやればいいのに、

それをあえて武道の中でもメジャーではない剣道を選んでやる人は、どちらかというと言員や芸術家、政治がかつた方などそれなりの立場がある人が多く、非常に真面目な人が多かったように思います。もしくは、なんとなく日本に興味があったからやってみたと若者達ですね。その人達と指導を通して関わる中で、「なんとか上手くしてあげたい。」という気持ちが強くなっていきました。実際、ゼロから教えるので、教えれば教えるだけ強くなるものだから、とても面白かったです。途中で投げ出したくないという気持ちももちろんありました。道具がないことも最初から分かっていたので、そこは自分で受け入れてなんとかするしかないなと思っていました。

また、協力隊からも派遣を後押ししていただき、現場にも理解を示していただきました。特に、当時の事務局長の青木盛久さんには、大変お世話になりました。外務省の課長も歴任された方でした。当時は、協力隊に出向されていて、この方が「剣道おもしろいじゃないか」と強烈に推していたので、剣道での派遣が実現されたという経緯もあります。その方には、私の活動にもとても注視していただいていたので、ことあるごとに連絡をいただき、様々な面でご支援いただきました。最終的に1992年の12月に一度ハンガリーにいらっしゃった際に、私の現場の仕事について現状の報告や不足している物資についてお

話をさせていただく機会がありました。その後、「よし、分かった。じゃあ、家のお金はしばらくの間は協力隊が出すから」「用具は協力隊の支援経費を確保するから頑張れ」と、住居の手配や不足物資についても後押しをさせていただいたこともあり、軌道に乗っていったということもあります。青木盛久さんはとてもおもしろい方で、事務局長を退任された後、様々な国の大使を歴任されました。途中で、ペルーのアルベルト・フジモリ大統領が就任されたときに、外務省の中でも力のある人が必要だということで青木さんが抜擢されました。その後、ペルーに行かれましたが、大使館の占拠事件が起きて、3か月間人質になった経験もあるお方です。その後は、中央アフリカの7か国くらいの大使を同時にされていました。そういった開発系に力を入れていた方で、私は未だに連絡を取らせていただいております。常に剣道のことを気にかけていただきました。今としては、私はとても人に恵まれたなあと感じています。

【酒井】素晴らしい方の目に留まったんですね。おそらく、それは阿部先生が真剣に取り組んでい



1993年 初めて訪れた
田舎の子どもクラブ

らっしゃったからでしょう。阿部先生は最初にハンガリーに行かれたとき、ブダペストだけでなく地方もまわられて指導されていたのでしょうか。

【阿部】はい。私が協力隊から言われた任務としては、体系的に剣道を指導するということでした。つまり、「ハンガリー剣道連盟のコーチとして、ハンガリーの剣道を盛り上げてください」ということだと私は解釈していました。のちに、ハンガリー剣道連盟と話をした際には、「名目上は首都にあるクラブの担当なのですが、ハンガリー剣道連盟で抱えているコーチなので、できるだけ各地をまわってください」ということでした。今でこそハンガリー国内には約500名の会員と、剣道と居合道合わせて約25のクラブがあり、多くの会員とクラブを抱えていますが、当時はまだブダペストに2つ、地方に3つくらいしかクラブはありませんでしたので、地方のクラブにも定期的に足を運ぶようにしていました。

【酒井】そういった中で、お聞きしたところによると、ジェル県ですかね。子ども達に指導をされて、とても感激されたという話も伺っています。ジェル県というのは、ブダペストから遠いのでしょうか。

【阿部】約100kmですので、あまり遠くはないと思います。ブダペストからウィーンに抜ける国道沿いの町なのですが、ちょうど、ウィーンとブダペストの間にある街です。偶然、その村の協働

農場のリーダーをやっている方が「子どもの教育のためにサッカーだけでは物足りない。何か始めよう」ということで、剣道クラブを立ち上げたようですが、ろくに道具もない状況でした。協働農場のリーダーが剣道を取り入れ始めて2年くらいでしたので、連盟も現状を把握するために「阿部先生ちょっと見てきてください」ということで、最初は真冬の一番寒い時期に4日間ほど通ったことを覚えています。そのクラブには当時、子どもが20人参加していました。その子達に剣道をやらせてみたら意外と上手でした。指導者はあまり上手ではありませんでしたが、子ども達は非常に上手でしたね。特に、小手一面が上手く打てていました。あれを見て「これは時間をかけて指導したら、強くなるだろうな」という期待を持ちました。その後はそのクラブに対して、私の後に入ってきた後続の隊員を常駐させたり、剣道具をできるだけ多く配分したりなど、できる限りのことをして育てていきました。

【酒井】最初は、竹刀もないというお話もお聞きましたが。

【阿部】はい（笑）。最初に稽古を見に行ったとき、子ども16人に対して竹刀は5~6本しかない状態でしたので、使いまわして対応したり、竹刀がない子にはモップの柄の部分や木を削った棒を使って練習していました。

【酒井】その子達の中には後に世界大会などで活躍した子達もいたのでしょうか。



竹刀の代わりにモップと木の枝

【阿部】 当時は 10 歳前後で初心者でしたが、そのまま大人になって、2012 年の世界大会の団体戦でハンガリーが第 3 位になった時は、3 人くらいがそこのクラブのメンバーですね。現在は 1 名しか残っていませんが、このクラブのメンバーがハンガリーの主力として活躍してくれました。

【酒井】 いま世界大会の話が出ましたが、世界大会やヨーロッパ大会などで印象に残っていることや思い出に残っていることをお話いただけますか。

【阿部】 私が初めて世界大会に行ったのは、1994 年にフランスのパリで行われた世界大会が記憶に残っています。ハンガリーに赴任して 2 年目くらいから世界大会にはコーチもしくは監督として参加していますが、その雰囲気は随分様変わりしてきたなというのは感じますね。もちろん世界全体のレベルが上がり、勢力図も変わってきていますし、日本の選

手は力をつけてきた諸外国勢にとっても苦勞されているように思います。我々ハンガリーは貧しい国ですので、お金の問題でいつも苦勞しました。特に、世界大会は様々な国で開催されますので、参加するためには開催国まで行かなければならず、どうしても交通費がかかってしまいます。もちろん世界大会は参加することで大変勉強になりますし、選手が剣道を続ける動機づけにもなります。結果がついてくれば良いなどは思っていますが、そう簡単なことでもないですから。とにかく、私は世界の剣道にとって世界大会は非常に重要な意味があると思います。

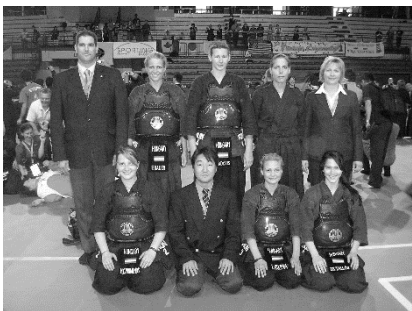
【酒井】 経済的な差というか、東と西でまったく違うというのは言われていますね。いま思い出しましたが、1997 年に第 35 回アジア・北アフリカ研究国際会議(35th International Congress of Asian and North African Studies)というのがありました。その際に、高橋進先生が団長でお話をされるということで、私もハンガリーに伺ったことがありましたね。10 人くらいで伺ったように記憶しています。その折は大人数でお邪魔して、阿部先生にも大変お世話になり



1993 年 初のヨーロッパ大会
フィンランド・ツウルク

ました。これは、先程お話にあった山地先生がデザインしてくださいました。そのとき、大石先生も一緒に伺い、いつもと同じく空港内で両替をして、ハンガリーに長く滞在していましたが、財布の中のお金が全く減らなくて、どうしたんだろうと話したことを覚えています。考えてみれば「ハンガリーの方々の 2~3 か月分の給料を持っているんだなあ」なんて話をしたのを思い出しました。そのような差がある中で、ハンガリーから遠征や大会に行くのは費用面で大変だと思いました。当時に比べればその差も狭まっているかと思いますがどうでしょうか。

【阿部】 そうですね。現在は理系の大学新卒で初任給が 10 万円行



2012 年 15WKC
イタリア・ノバラ 女子チーム



15WKC
男子チーム 3 位



15WKC

かないくらいですね。90年代当時は300ドルくらいだったので、倍以上にはなっていると思います。ですが、西側と比べるとまだまだ低いですね。

【酒井】当時は世界大会に出場する際に、旅費などのお金を集めるのはどうされていたのですか。

【阿部】現在は、剣道連盟が国からある程度の支援を受けています。国からの補助で補えない部分の残りは実費になります。実際には半額もしくは30%程度が実費となります。昔は基本的には自己負担でしたので、選手によっては2~3か月分の給料を貯めて出場している選手もいました。ですが、今はもうそこまでできないですね。やる気の問題もありますが、一度連盟からお金をもらって遠征をしてしまうと難しいですね。お金を出す出さないで、いつも連盟とはもめているのが現状です。まあ、お金がないと海外で何もできないので重要な話だとは思いますが。

【酒井】それでは話題を次に進めて、阿部先生は海外に出られて30年近いと思いますが、海外に出てみて初めて見えた「日本の剣道」について何か感じたことはありますか。

【阿部】剣道界を世界全体から見回してみると、技術的にも、組織的にも、やっぱりトップはトップで、未だに様々な見方をする方がいますが、日本の剣道を理想というか、ひとつの目標として世界は動いていることは変わっていないと思います。しかし、それを分

かっている日本の関係者の方がいるのかという点に、私は疑問を持っています。まだ普及度が高くなかった時代では、当然、日本からいらっしゃる指導者の方は、それなりにプライドを持って様々なことをされていたと思います。ですが、最近は気軽に海外に行けるようになり、剣道を通じて指導者の派遣依頼が多くなってきましたが、派遣先での様子を拝見させていただいていると、昔とは雰囲気が変わってきたなと感じます。気軽にと言ったら失礼ですが、日本人の言葉や行動に対する責任感や影響力をあまり考えない指導者が意外と多いように思います。たまに、そのようなことでトラブルを起こしているような話も聞きますね。残念な部分もありますが、敷居が低くなったという良い意味で捉えるとヨーロッパが日本と気軽に関係が持てるようになったのかなど。ですが、それは日本にいるとなかなか分からないですし、この30年間を見ても相当流れが変わってきていると感じますね。

【酒井】やっぱり、海外の方は日本の剣道に対する憧れは強いのでしょうか。

【阿部】はい。強いと思います。特に、これだけ世界大会がクローズアップされ、競技としての剣道が前面にでてきているという側面ではあると思います。特に、インターネットで動画がずいぶん配信されるようになったため、昔であれば1回でも目にしたことがあれば威張れたのですが、今は有名



試合会場にて

剣士の姿がいつでも好きなときに見ることができます。目で映像を繰り返し見ることができるため、技術力向上にも繋がっていると感じています。ただ、最近はそれ（剣道の競技的側面）だけで本当に良いのだろうかという疑問に感じています。例えば、ヨーロッパの剣道連盟の会長を長くされていたアラン・デュカルメ元会長と一度インタビューで話をしたとき「もしも剣道が競技としての意味しなくなったら、剣道のお先は真っ暗だ」というお話をさせていただきましたけれども、剣道に対する魅力と言いますか、競技以外に魅力が見えてこないとなると、剣道のバランスの崩れに繋がってくるのではないかと危惧しています。

【酒井】分かりました。耳の痛い話ですが、しっかり向き合っていくべき問題ですね。その辺、また後でご質問等あると思うのでよろしくお願ひします。阿部先生は、長く日本を出て指導をされているので、その中での楽しさや難しさを感じていらっしゃると思います。国民性の違いによって指導



防具姿の阿部氏

の仕方も変化していくとは思いますが、その辺はいかがでしょうか。

【阿部】 酒井先生もフィンランド、ドイツ、ルーマニアやハンガリーなどをご覧になられて理解されていると思いますが、その国々によって、あるいは同じ国の中でも地域によって独特の雰囲気を持っています。例えば、私達がいるハンガリーは東ヨーロッパの真ん中に位置していますが、北の寒い方に行けば、私達から見ると真面目度が上がっていきます。ですが、南のほうに下がっていくと、オープンというかオープン過ぎる部分もあったり（笑）。また、ハンガリーから見ると西の先進国の方では、真面目だけれども様々な意味で自分の国の特色が出ていたりします。これがルーマニアのほうに行くと、ハンガリー人だと考え込んでしまうようなことでも「まあ、いいや」というように流してしまうような国民性を持った国が増えてきたりしますね。ですから、指導する場合でも国によってその方法は大きく変化してきますので、ある程度国々の精神性や環境と

かを見ていかないといけませんね。たとえば、ギリシャでの指導方法をそのままフィンランドで使ってみようとしてもなかなか上手くいかないのではないかなと思います。やはり、その土地なりのものを持っていますからね。

【酒井】長くその国の人達と一緒に生活することが重要になってきますよね。以前、阿部先生にお伺いしましたが「一緒に物を食べて、一緒に服を着て、その土地の水を飲んで、体の中の水が全て入れ替わってからようやく分かってくるんじゃないかな」とおっしゃっていたのを覚えています、その辺はいかがでしょうか。

【阿部】私がハンガリーに長く残ったきっかけのひとつはそこにあります。協力隊の隊員としてボランティア派遣された当時、日本の外務省から支給されていた金額が1か月500ドルで、それを使って生活しなさいということでした。この金額は、派遣された国の男性の平均月収、現地の生活水準に近いように設定されています。最初の国で手探りだったということもあって、実際に現地の平均月収が300ドル程度のところを国からは500ドルを支給していただきました。つまり、私が500ドルを持って生活をしているということは結構リッチなんですよ。稽古が終わった後に若い連中を連れて食事に行ったりもしていました。ある日、稽古が終わった後に指導をしていると、何人かの隊員に「阿部先生は、剣道を教えているだけで、いいな」、

「剣道を教えて後はぶらぶらしているだけで、俺達は仕事をした後に剣道に来ているのに」、「先生と一緒にしないでくれ。できることとできないこいがある」などと言われました。それを聞いたときカチンとも来ませんでした、逆に恥ずかしいなと思いましたね。本当にこの人達を納得させるためには、彼らの土俵に降りないと彼らも心を開いてくれない、彼らが本気にならないなと思いましたね。だったら協力隊を辞めて戻ったとき「同じ土俵でやってやるよ」と思ったのがきっかけですね。今ではハンガリーに28~29年いますが、みんな私がハンガリー人と同じ生活をしているのを知っているから「阿部先生は貧しいんだから」とカバーしてくれるようになりました（笑）。そこは、面白いところだと思いますね。

【酒井】今のお話と関係があるかは分かりませんが、ハンガリーの人間として活動されているから逆に日本からのデリケーションなども引き受けたりもする立場にありますよね。その辺のところのご苦労やそちらにとってのメリットがあったことなどのお話はありますか。

【阿部】日本から来られるデリケーションや使節団のパターンとしては、ひとつは全剣連からの公式派遣ですね。昔、巡回指導ということでヨーロッパをまわられている際にハンガリーに来ていただきました。具体的には、ハンガリーカップという国際大会があるときの試合と合宿のために

派遣要請をしました。それ以外には、段審査やヨーロッパ大会を開催するときも受け入れますね。もうひとつは、個人的にハンガリーとの繋がりで来られることですね。うちの場合、大学関係が多いのと思います。様々な大学の先生に来ていただいて、合宿の指導をしていただくとかですね。その他には、個人的に誰かのルートで足を運んでもらっている場合もあります。それぞれ目的が違いますので雰囲気も違います。そのときそのときで様子や状況を見て、対応しているのが中間に立っている私の役目になります。ハンガリー一人からすると誰が来ても日本人は日本人という気持ちがあります。なので、この使節団はどのような目的で来ていて、違う団体はまた違う目的で来ていてというようなところを理解してもらおうのが私としては苦勞・苦痛でしたね。ハンガリー人に任せきってしまうとなかなか上手いかない部分が多かったです。「この間プライベートで来た先生は一晚中飲み連れてまわっても文句はなかったけれども、全剣連から来た先生はなんで連れまわったらいけないのか」などそういう話もありまして、全体の中でこの使節団がどういう意味を持っているとかを説明しなければいけませんでしたので。今は、ハンガリーはハンガリーなりに対応できるようになってきたので、その仕事からは足を洗っていますけどね。

【酒井】いまハンガリーカップの

お話が出ましたが、私も 2007 年から 2014 年まで 7 回くらい学生と一緒に邪魔しましたね。これはすごい行事だと思います。これは今も継続されているのでしょうか。

【阿部】今年は開催しませんでした。形を変えて今もやっています。

【酒井】当時、私がお邪魔していたときは 3 日間講習会を行って、3 日目の午後に昇段審査、4 日目・5 日目に個人と団体の試合でしたね。あれは東欧が中心でしょうか。

【阿部】そうですね。半分以上は東ヨーロッパから足を運んでいただいていますね。

【酒井】あれは何か国くらいが集まっていますか。

【阿部】12~13 か国くらいだと思います。

【酒井】そうですね。20 か国くらいの参加があったような気がします。

【阿部】たまに 20 か国近くの時もあったかな。まあ平均すると 15 か国で人数的には多くて 200~250 くらいだと思います。

【酒井】これの運営はとてご苦勞されているのではないのでしょうか。ハンガリー剣道連盟にはミハク・フノールさんという優秀な事務局長もいたと思いますが、1 回だけではなく続けていくことのご苦勞もあると思いますが、いかがでしょうか。

【阿部】はい。国際的な企画は言葉の問題が一番大変ですね。今は若い人達は外国語教育が進んで

いますので、英語を使える人が増えてきたので比較的スムーズにコミュニケーションをとることができるようになってきています。15 年くらい前になると東ヨーロッパには英語が苦手な方が多く、講習会などを開催し英語とハンガリー語で講習を行ったとしても結果的に何も伝わらず「参加者は合宿費を払って来たのに、なぜ対応してくれないのか」と言う方もいました。ですが、1 人や 2 人しか来ていない小さい国の言語まではカバーしきれませんので、こういった部分で非常に苦勞しました。特に、実技だけなら日本語だけでなんとかなりますが、酒井先生に毎年お願いしていた 2 日目、3 日目の講義になると、これはもう非常に大変です。難しい内容になると英語でも理解できない人はいたと思います。中には、ハンガリー人にハンガリー語で説明したとしても分からない人はいましたね（笑）。この部分がやっぱり一番大変でした。

【酒井】ありがとうございます。最後にハンガリー剣道の将来、または、それを世界剣道に置き換えていただいても構いませんが、阿部先生の思うところをお話しいただきたいです。

【阿部】ハンガリー剣道連盟の中ではよくそのような話をします。先程の話とも繋がりますが、ハンガリーの剣道をどちらの方向に持っていくかということについてです。今は若い剣道、若い剣士達の競技志向がものすごく強くなっています。この点は良いこと

だとも思いますが、剣道には文化的・思想的・文化的側面での魅力も非常に多いですから、それをどうやって連盟として普及させていくかということ話し合っています。具体的に言うと、競技的な側面では試合があって、試合に出て、試合に勝つということが目的・目標になります。もう一方の文化的側面については、生涯剣道であったり、剣道を通して日本の文化を学びたい人にどう伝えていくか。何ができるのか。どういった視線で取り組んでいったらいいかということはずいぶん話し合っています。そのためには、現在であれば画像を多く使うとか、出版物を出すとかですね。それから、僕らも最近始めましたが、やっぱり高齢になっても剣道を続けるためには何をしたらいいのか、どういうふうに考えていったらいいのかということを知りたいという人が徐々に増えてきています。

ハンガリーの取り組みとしては、具体的に35歳以上の三段以上限定で、比較的年齢の高い人だけを集めて3日間程度の生涯剣道合宿というものをこの5~6年やっています。講師には、お付き合いのある太田昌孝先生をお願いをしています。現在は、国士舘大学を退官されておりますが、太田先生に来ていただいて立ち合いを一つひとつ見ていただいたり、講義という形で様々な話をいただいています。やっぱり、ポイントはずっと続けるために何をしたらいいのかということ

ですね。この合宿を行うと、中年以上の方々は目標が改めて定まるようです。若い人達がやっているガンガンパワーを付けてやるような剣道も、この先持たないだろうという危機感を持っています。ですが、逆に細かい体の使い方だったり、様々なものの考え方を教わると楽しみが増えるみたいで、非常に好評です。

ハンガリーだけでなく、ヨーロッパ全体でもそういった流れが出てきています。たとえば、七段以上限定の講習会をやりたいなどの要望が出ています。また、日本からは若い講師じゃなくて、年配の大先生に来ていただき、講話をしていただくといったアイデアなどがどんどん挙がっています。だからある意味で、競技的な部分と二極化してきてはいるのですが、全体的に見たらだんだん剣道に対して理解が深まってきましたので、非常に面白いと思います。

【酒井】ありがとうございます。生涯剣道とか生涯武道というのは、なかなか外国では難しいところですけども、素晴らしい取り組みだと思います。ありがとうございました。

ここで、折角ですので質疑応答の時間を少し取りたいと思いますが、ご質問がある先生はご発言いただいてもよろしいのですが、いかがでしょうか。

【軽米】阿部先生ご無沙汰しております。天理大学の軽米です。

【阿部】ご無沙汰しています。

【軽米】いま日本国内も新型コロナ



質問する軽米氏

ウイルスの関係で剣道がなかなか実践しづらい状況が続いていますが、ハンガリーの方はどのような状況なのでしょう。教えてください。

【阿部】はい。今日参加しているしゃるカメラさんには非常に失礼ですけども、うちは隣のラテン系のルーマニアほどオープンではなく、かなり自粛をしているという現状です。ルーマニアはものすごくオープン過ぎて、感染者が急増してしまっていて大変な状況と聞いています。ハンガリーの場合、つい昨日、政府発表で国境をすべて閉鎖して外国の方を入れないようにすると言っていましたね。3月の半ばから3、4、5、6月の半ばまで自粛期間が続きました。剣道ができていせんでしたが、6月末からは地方から段階的にスポーツも始めて良いということになりましたので、この夏場うちはずっとやっています。普段と変わらない状況でやっています。しかし、他の種目を見ると、先週辺りからレスリングのナショナルチームのメンバーが集団感染した報告や、昨日、一昨日も空手のナショナルチームから陽性者が出たなどの報告を結構聞いていますし、政府関係者でも大臣が一人感染しているみたいですし、確実に広まっています。9



質問する数馬副会長

月から学校も始まりますが、おそらく10月くらいにはまたオンラインに切り替わるというような状況です。

【軽米】ありがとうございます。はい、くれぐれもご自愛ください。

【阿部】ありがとうございます。

【酒井】はい、他の先生方で聞いておきたいことはございますか。

【数馬】貴重なお話ありがとうございます。1999年の時に私も一度お伺いさせていただいて、本当に綺麗な街並みを覚えています。また、稽古終わった後には、川の近くにある400年くらい続く温泉などもあって、とても日本に近いような素敵な国だなという印象があります。今日のお話の中で、特に最後の生涯剣道について私が一番聞きたかったところでもありました。このお話に関連することを一点ご質問させてください。アラン元会長がおっしゃった「剣道は競技しか魅力が見えてこないというふうになったら将来が大変だ」というお話をされていて、やはり日本の責任というようなこともおっしゃっていたと思います。以前にも聞いたことがあります。剣道の理念という言葉そのものの理解がそれぞれの国によって違ったりするといったことは確かだと思いますが、ただ竹刀を使っているということ

は共通していますし、その起源が刀であったり、修練方法が木刀であったりするという事に繋げていくと日本剣道形というようなどころにも目を向けることができますと思います。現在、私もこのコロナウイルスの影響で何もできてない状態ですが、今まで見つめていなかった日本剣道形に取り組んでいます。その中から体の捌きなど、すごく重要なことを学べるなと感じていました。私はヨーロッパの皆さんが日本の我々に比べて形を稽古している時間がものすごくたくさん機会があつて、拝見すると非常に上手だという印象を受けています。そういった意味でもやはりヨーロッパの方、特にハンガリーの方が形をどのようにしているのか、学ぼうと修練されているのかというように聞きたいことと、形のことについて日本に期待するといったことがあればこの機会にお聞かせいただきたいなと思いました。

【阿部】ご質問ありがとうございます。数馬先生が今おっしゃられている通り、形に関してはヨーロッパの方々も全体的に見ても人気があり好きな方が多いです。特に、日本の方と比べても低段者ですね。五段以下くらいだったら日本人よりもはるかに上手いと思う人がたくさんいます。やはり、時間をかけてやっていますし、基本的にパターン化された形の稽古っていうのが好きというような印象を受けます。特に、昔から受け継がれているとか、伝統があ

るなんてことになると、それだけで非常に魅了されてしまう、好きになってしまうのがヨーロッパ人の一つの傾向です。そういった意味でも、形の稽古はヨーロッパにとって非常にマッチはしていると思いますね。

うちの場合、改めて剣道形を特別にやっていますが、基本的には各クラブに任せています。僕も今一つ反省がありまして、周りの国と比べると確かにハンガリー人は形が下手だなという反省がありました。最近、形だけの講習会を開催したりなど、お互いに練習する会なども増やしています。中でも、私個人的にいろいろな国を見ていて、形が上手だなと思うのはドイツ人とフィンランド人ですね。性格的にも合うのかなって思います。そういう話をしていたら、とあるカトリック系の彼はイタリア人なのかな「あいつらプロテスタントだから」と言っていましたけれども、突っ込んでやるのが好きで、型にはまったものが好きだからというふざけた言い方をしていました(笑)。しかし、実際にそういう違いもあることを考えると、ハンガリーもカトリックだから真面目にやればできるはずだけれども、できてないということは全体的にあまり力を入れてこなかったせいかなと反省はしています。

形の意味自体を若い子どもは新しいものだに興味を持つのですが、三段とか四段とかになって形を覚えてできるからということで、あまり形の稽古に取り組み



質問する植原氏

なくなってきました。ですが、これが 40 過ぎて 50 近くになって五段、六段、七段なんて受けるようになってくるとまた形に戻ってくるような人達がいる（笑）。30 年以内だとこのサイクルを見ることができませんでした。最近「あ、年を取ってくるとまた戻ってくる。戻ってくるというよりはまた新たな何かに気づくものがあるのかな」と長い目で見ていくような感覚を持つようになりました。生涯剣道のことにしてもそうで、若いうちから生涯剣道なんて言っている中学生、高校生が居たら気持ち悪いくらいなものですから（笑）。そのような年齢になって、初めて理解してくれるのだなというのを改めて最近感じています。あまり頭ごなしに言っても意味がないな、必要性を感じたときに「ポンっ」と引き出しからアイデアを出せばいいのかなというように考えています。でもその中で、やはり形は非常に大切で、凝っている人は日本剣道形だけじゃ物足りないみたいで、インターネットなどで様々なものを見つけて実践している方は結構いますし、非常に重要なことだと思っています。

【数馬】ありがとうございました。

【酒井】ありがとうございます。時間のこともありますので、あと

もうお一方くらいですね。どなたか質問ございますか。

【植原】植原です。いいでしょうか。

【酒井】どうぞ。

【植原】阿部先生、ご無沙汰しています。

私も折々自分の授業で武道を専門にしていない学生に対して、武道が国際的に普及するとか国際化するという話をするときに、阿部先生のいろいろな体験談を使わせていただいています。先生の本を見ながらですね、いろいろ話をさせていただいております。その際に一番インパクトがあったのは、外国の方が剣道をやる時に「日本は好きだし剣道も好きだけれども、別に日本人になりたいわけじゃないんだ」というお話もあったと思います。要するに、日本の武道であったり剣道というものを理解はしてくれるけれども、日本でやっている通りにやらされることにはやっぱり文化的な抵抗がある。その辺のことから、どうやら学生は武道のことをスポーツ・競技的に考えていただけ「そういうものじゃないらしいぞ」という気づきが学生に見えてくるというときに、阿部先生のお話を使わせてもらっている次第です。

そして、最初にあった青年海外協力隊の件でお聞きしたいことがあります。今の学生、若い連中って結構やっぱり内向き傾向があり、海外に出て自分の持ち味を生かしたいという学生が思った以上に少ないと感じています。大

学教員が「青年海外協力隊の制度を使って外に行ってみろよ」と言うと、2~3 年で「ああ、良い体験してきたなあ」でまた日本に戻ってくると。でも、派遣される側からすると「それじゃあ困るんだ」と。「ああ、良い体験できたな」で帰ってくるんじゃないくて、その国に文化というか剣道で貢献するというのが求められると思います。骨を埋めろとまでは言わないにしても、受け入れる側からすると日本の若い人が来てもらったときに、どういう意識をもって、どのような役割を果たして欲しいかということについて阿部先生のお考えを聞かせていただければ、また私が若い学生達にもの言うときに生かせるかなと思うので、何かコメントいただけますでしょうか。

【阿部】剣道に限っての話ですが、協力隊で我々が派遣された当時、おおよそ 20 代半ば過ぎから 35 歳くらいまでの若い人で五段前後の人が派遣されていました。ハンガリー、ルーマニア、ブルガリアそれからポーランド、その後南米など様々な所へ派遣され、現在では 20 か国くらいになると聞いています。今も続いています。若い協力隊の隊員ではなく、途中から定年されたシニアの年配の方を派遣するシステムができました。そういった方々が海外に行っただけで、様々な面でご活躍されている部分はありますが、これが場所によって効果がある場合と効果がない場合があります。たとえば、ある程度連盟が出

来上がっている国にシニアの方が行かれると経験豊富なんで、連盟として指導も「こうやったら、こう」なんていう道筋なんてだいたい見えますから、すごく重宝がられるんです。一方で、私が来た当初のハンガリーのように、みんな何も分からないのだけれども、エネルギーしかないこういったところに年配の方がこられると噛み合わないわけですね。彼らからすると、一緒に酒を飲んで、一緒に倒れるまで稽古してくれるような若い人のほうが良いわけです。その連盟、その国の成熟度によって求められる人材が違うので、その国のどこの部分に力を入れたいのかとか、その役割をきちっと把握していればどこに行っても活躍はできると思います。私が当時、ハンガリーに来たときは27歳で、若い連中とごちゃごちゃになってやっていたけれど、今のハンガリーに当時の

27歳の私が来ても居場所がないと思います（笑）。それは国によって違いますので、役割を見極め、何ができるのかを考えれば、様々なことが見えてくるんじゃないかなと思います。

【植原】なるほど。やはり、いきなり飛び込むというよりも、ある程度その国の事情を勉強して、情報もしっかりと理解をする。それが大事だということですね。

【阿部】ハンガリーは、私が来てから30年経っていますので、情報は増えていますし、全剣連にしる、他の協力隊にしる、他の剣道関係の組織にしる、人脈もあり情報も持っていると思いますので、それを上手にまわせるようにできれば、お互いに効果のある喜ばしい関係が若者なりにできると思います。

【植原】やはり、初期の時代より今は情報をよりよく生かすというのが重要になってきますね。

【阿部】そうしないと逆に要らないってケースも出てきてしまうと思います（笑）。

【植原】なるほど。肝に銘じて学生を指導したいと思います。ありがとうございます。

【酒井】ありがとうございます。長時間にわたり、阿部先生、どうもありがとうございました。ハンガリーで30年近くご指導されてこられた阿部先生ならではのお話が伺えたと思います。まさしく、剣道の海外事情の最前線を今日はお話しいただいたということで、ありがとうございました。まだ、質問をしたいと思っている先生方もいらっしゃると思いますけれども、時間も参りましたので、これで特別講演を終わりにさせていただきます。どうもありがとうございました。

【阿部】ありがとうございました。

令和元年度 剣道専門分科会事業報告

1) 総会の開催

令和元年9月6日(金)、國學院大學横浜たまプラーザキャンパス1号館B2F102教室において、平成30年度事業報告および平成30年度決算、令和元年度事業計画および令和元年度予算を審議し、承認した。

2) 日本武道学会第52回大会における分科会企画講演会の開催

下記の内容で講演会を開催した。

テーマ:「人口減少時代におけるスポーツ」

日時: 令和元年9月6日(金) 15:00~16:30

場所: 國學院大學横浜たまプラーザキャンパス1号館B2F102教室

講師: 独立行政法人日本スポーツ振興センター情報・国際部部長 和久 貴洋 氏

司会: 常磐大学 小澤 聡 氏、専修大学 齋藤 実 氏

3) 研究会の開催

令和元年度の研究会は、新型コロナウイルス感染症の拡大により次年度に延期することとした。

<延期>

テーマ: 剣道における安全性の研究を振り返る 一剣道用具の研究を中心に-

日時: 令和2年3月21日(土) 15:00~16:15

場所: 明治大学中野キャンパス 高層棟 515教室

講師: 百鬼史訓氏(日本武道学会会長、剣道専門分科会顧問)

4) 幹事会の開催(3回)

下記の日時・場所で、幹事会を3回開催した。

第1回 令和元年5月11日(土)(明治大学駿河台キャンパス研究棟2階第9会議室)

第2回 令和元年7月13日(土)(明治大学駿河台キャンパス研究棟4階第1会議室)

第3回 令和元年11月16日(土)(明治大学和泉キャンパス体育館ウエスト(西)棟講義室)

5) 広報活動の活性化

- ・ホームページによる情報提供を行った。
- ・東京学連剣友連合会大会において、広報活動を実施した。

6) 会報『ESPRIT 2019』の発行

会報『ESPRIT 2019』を令和元年10月18日付で発行した。

7) ホームページ「KENDO ARCHIVES」の運営

ホームページ「KENDO ARCHIVES」(<http://www.budo.ac/kendo/>)を運営した。ホームページにおいて、剣道専門分科会企画、研究会の案内と報告を行った。また、ESPRIT2018を公開した。

8) 会費の徴収

令和元年度会費2,000円を徴収した。

9) 会員数

令和2年3月31日現在で会員数は113名(うち顧問7名、名誉会員8名)となった。

以上

令和元年度 剣道専門分科会 一般会計決算書（令和元年4月1日～令和2年3月31日）(案)

1.収入の部

科 目	予算額	決算額	差異	摘 要
1. 前年度繰越金	543,370	543,370	0	平成30年度からの繰越金
2. 特別会計より組入	0	0	0	
3. 会員会費	220,000	216,000	4,000	2,000円×108口
4. 本部助成金	50,000	50,000	0	学会本部より助成金
5. 広告収入	48,000	47,730	270	ホームページ、バナー広告 2,000円/月 平成30年度、令和元年度分
6. その他	0	10,000	△ 10,000	東京学連剣友連合会より寄付金
7. 利息	0	9	△ 9	
当期収入合計	861,370	867,109	△ 5,739	

(単位/円)

2.支出の部

科 目	予算額	決算額	差異	摘 要
1. 研究助成費	150,000	70,000	80,000	第52回大会分科会企画、及び研究会の助成金
2. 広報活動費	30,000	29,128	872	東京学連剣友連合会大会への広告(ESPRIT2018特別版提供)
3. 印刷・消耗品費	80,000	72,747	7,253	会報印刷代、事務用品等
4. 通信費	40,000	57,619	△ 17,619	郵送料、切手・はがき代、振り込み代等
5. 会議費	20,000	7,223	12,777	幹事会等会議費
6. 交通費	80,000	16,000	64,000	幹事会等交通費
7. 備人費	80,000	39,000	41,000	事務局および広報活動におけるアルバイト
8. 予備費	381,370	0	381,370	
9. 次年度繰越し金	0	575,392	△ 575,392	
当期支出合計	861,370	867,109	△ 5,739	

(単位/円)

監査の結果、適正であることを証明いたします。

令和 2 年 9 月 4 日

日本武道学会剣道専門分科会監事

八木沢 誠



川井 良介



令和2年度 剣道専門分科会事業計画

1) 総会の開催

下記の日時・場所において総会を開催する。

日 時： 令和2年9月7日（月）～13日（日）

場 所： メール審議

議 題： 会長・副会長の承認、
令和元年度事業報告および令和元年度決算、
令和2年度事業計画および令和2年度予算、ほか

2) 日本武道学会第53回大会における分科会企画講演の開催

下記の内容で、講演を開催する。

日 時： 令和2年9月8日（火） 14:30～16:00

場 所： Zoom ミーティング

テーマ： 剣道と新型コロナウイルス感染症とをどのように共存させていくのか？

講 師： 宮坂 信之 先生（東京医科歯科大学名誉教授）

司 会： 廣野 準一 先生（信州大学）

3) 研究会の開催

令和2年度研究会を以下の日程で実施する予定である。

日 時： 令和3年3月27日（土）全国理事会終了後

場 所： Zoom ミーティング

テーマ： 剣道の海外事情最前線

講 師： クリストファー・ヤング氏（北米トヨタ自動車・バイスプレジデント、アメリカ剣道
ナショナルチーム・男子コーチ）

4) 幹事会の開催

原則として本部理事会開催日に幹事会を行う。

（5月、7月、11月、3月）

5) 広報活動の活性化

- ・ホームページによる情報提供を行う。
- ・剣道に関する学術情報を英訳し、発信する。
- ・東京学連剣友連合会大会において広報活動を実施する。

6) 会報『ESPRIT 2020』の発行

会報『ESPRIT 2020』を発行する（9月末発行予定）。

7) ホームページ「KENDO ARCHIVES」の運営

ホームページ「KENDO ARCHIVES」(<http://www.budo.ac/kendo/>) を運営する。

8) 会費の徴収

令和2年度会費 2,000 円を徴収する。

以上

令和2年度 剣道専門分科会 一般会計予算書（令和2年4月1日～令和3年3月31日）(案)

1.収入の部

科 目	予算額	前年度予算額	差異	摘 要
1. 前年度繰越金	575,392	543,370	32,022	令和元年度からの繰越金
2. 特別会計より組入	0	0	0	
3. 会員会費	200,000	220,000	△ 20,000	2,000円×100口
4. 本部助成金	50,000	50,000	0	学会本部より助成金
5. 広告収入	24,000	48,000	△ 24,000	ホームページ、バナー広告 2,000円/月 令和2年度分
6. その他	0	0	0	
7. 利息	0	0	0	
当期収入合計	849,392	861,370	△ 11,978	

(単位/円)

2.支出の部

科 目	予算額	前年度予算額	差異	摘 要
1. 研究助成費	150,000	150,000	0	第53回大会分科会企画、及び研究会の助成金
2. 広報活動費	30,000	30,000	0	恒常的広報活動への助成、東京学連剣友連合会大会における広報活動
3. 印刷・消耗品費	80,000	80,000	0	会報印刷代、事務用品等
4. 通信費	40,000	40,000	0	郵送料、切手・はがき代等
5. 会議費	20,000	20,000	0	幹事会等会議費
6. 交通費	80,000	80,000	0	幹事会等交通費
7. 備人費	80,000	80,000	0	事務局および広報活動におけるアルバイト
8. 予備費	369,392	381,370	△ 11,978	
当期支出合計	849,392	861,370	△ 11,978	

(単位/円)

令和元年度 特別会計決算(案)

1.収入の部			
科 目	予算額	決算	摘 要
1)前年度繰越金	511,931	511,931	
2)その他	0	0	
3)利息	0	0	
当期収入合計	511,931	511,931	(単位/円)
2.支出の部			
科 目	予算額	決算	摘 要
1)一般会計へ繰入	0	0	
2)研究助成費	270,000	0	
3)広報活動費	100,000	0	
4)予備費	141,931	0	
当期支出合計	511,931	0	(単位/円)
当期 差し引き残高(繰越金)		511,931	

令和2年度 特別会計予算(案)

1.収入の部			
科 目	予算額	決算	摘 要
1)前年度繰越金	511,931		
2)その他	0		
当期収入合計	511,931		(単位/円)
2.支出の部			
科 目	予算額	決算	摘 要
1)一般会計へ繰入	0		
2)研究助成費	270,000		
3)広報活動費	100,000		
4)予備費	141,931		
当期支出合計	511,931		(単位/円)

事務局だより

会員の皆様におかれましては、平素より剣道専門分科会の運営に格別のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。ここに剣道専門分科会会報 ESPRIT2020 を送付させていただくことができました。

本年度から剣道専門分科会の体制が変わりました。会長に長尾先生、副会長に数馬先生、幹事長に酒井先生、副幹事長に大石先生が就かれることになりました。新体制の任期において、皆様の変わらぬご協力の下、滞りなく運営できれば幸いです。

本誌で掲載させていただきました学会大会での分科会企画講演のタイトルは「人口減少時代におけるスポーツ」「剣道と新型コロナウイルス感染症とをどのように共存させていくのか？」のように今まさに取り組むべき問題を扱っています。また、若手研究者の動向では、学問とパフォーマンスをつなぐ研究をされている先生を紹介させていただきました。そして、新たな企画として剣道の海外事情最前線が始まりました。どのページを見ても、わたしたちが知っておくべき情報が詰まっていると思います。これからも本誌から有益な情報提供ができればと思っておりますので、皆様からの引き続きのご協力をよろしくお願い申し上げます。

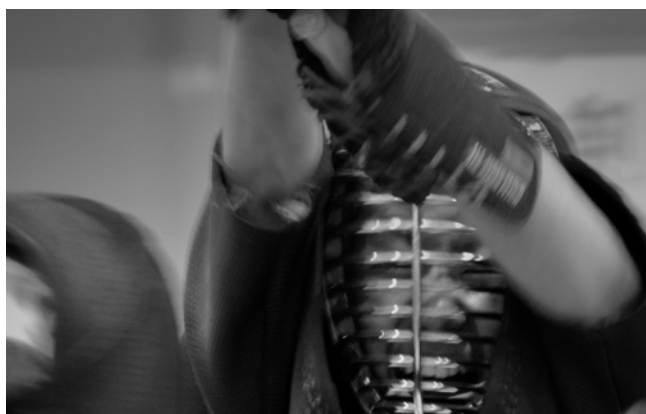
末筆ではございますが、皆様のご健勝と益々のご活躍をお祈り申し上げます。

事務局長

奥村 基生（東京学芸大学）

剣道専門分科会会報 ESPRIT 編集委員

長尾 進
数馬 広二
酒井 利信
大石 純子
齋藤 実
奥村 基生
廣野 準一
川井 良介



日本武道学会剣道専門分科会事務局

〒184-8501 東京都小金井市貫井北町 4-1-1

東京学芸大学 芸術・スポーツ科学系 奥村研究室内

E-mail: okumura@u-gakugei.ac.jp